

『学習院大学 経済論集』第47巻 第4号 (2011年1月)

# 「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」 現地調査

—熱帯季節林山間地域の持続的社会経済発展に資する森林管理哲学の考察—

富田 育磨<sup>\*</sup>、川嶋 辰彦<sup>‡</sup>

## 目次

- 1 はじめに
    - 1-1 目的及び構成
    - 1-2 ホエヒンラートナイ村の基本特性
  - 2 関連する資料及び文献、並びに本稿のアプローチ
    - 2-1 関連する資料及び文献
    - 2-2 アプローチ
  - 3 ホエヒンラートナイ村に於ける森林保全型農業
    - 3-1 土地利用形態: 2008年
    - 3-2 農作物の生産量: 2008年
    - 3-3 農作業の年間スケジュール (農業カレンダー)
  - 4 換金性作物の栽培 (1): 茶葉の収穫
    - 4-1 茶葉の収穫作業
    - 4-2 普通茶葉の収穫に関するデータ (1): 2009年末~2010年初
    - 4-3 普通茶葉の収穫に関するデータ (2): 2008年末~2009年初
    - 4-4 茶葉の収穫に関する村人の共有認識
    - 4-5 自家製茶法
  - 5 換金性作物の栽培 (2): タケノコの採取
    - 5-1 タケノコの採取作業
    - 5-2 タケノコの採取に関するデータ (1): 2010年
    - 5-3 タケノコの採取に関するデータ (2): 2009年
    - 5-4 タケノコの採取に関するデータ (3): 2008年
    - 5-5 タケノコの採取に関する村人の共有認識
  - 6 おわりに
    - 6-1 新たに得られた知見
    - 6-2 今後の課題
- 謝辞  
参考文献

\* 学習院大学川嶋辰彦教授研究室リサーチ・アシスタント。2006年2月から2010年12月までの間に、合わせて350日間以上、タイ北西部山村に滞在し、第二筆者と共に現地でのヴォランティア活動やフィールド調査に携わってきた。

‡ 学習院大学経済学部。GONGOVAプロジェクト責任者。GONGOVAの概要については、脚注7を参照されたい。

## 1 はじめに

本章では、先ず本稿の目的及び構成について述べる。次いで、本稿が考察対象に据える、カレン族居住山村ホエヒンラートナイ村<sup>1)</sup> Huay Hin Lahd Nai (チェンライ県 Chiang Rai ウィアンパパオ郡 Wiang Pa Pao バンポン区 Ban Pong ホエヒンラート村 Huay Hin Lahd 大字 (おおあざ) ホエヒンラートナイ) の基本特性を説明する。

### 1-1 目的及び構成

昨今その社会的・経済的重要性を愈々高めつつある NGO ヴォランティア活動プログラム<sup>2)</sup> を、より合目的的に執行するには、NGO が協力対象とする地域の特質に関する重層的理解が不可欠である。筆者らはこの視点に立ち、先の研究<sup>3)</sup> でカレン族の音楽的特質を考察したが、その折り、所謂「森林保全型農業 agro-forestry」<sup>4)</sup> を実践するホエヒンラートナイ村では、「定住人口の年齢構造特性」に関し、「村落の総人口に対して若者の占める割合が多い」<sup>5)</sup> 点に少なからぬ関心を持つに至った<sup>6)</sup>。その理由は、森林保全型農業が同村で成功裡に実践されている事実こそが、人口年齢構造をはじめとする同村の誇る諸特性に、強い影響を与えている主要素ではないかと考えたことによる。

本稿では以上の背景を踏まえ、同村で見られる農業経済的特質、就中、森林保全型農業の実態を考察する。より具体的に言えば、筆者らが草の根的国際協力 NGO プログラムである GONGOVA<sup>7)</sup> を実施する中で試みた、「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」に

- 1) タイの行政システムに照らして厳密に言うと、この村はホエヒンラート村 (又は第七番村) 大字ホエヒンラートナイと呼ぶべきである。しかし実質的な便宜上本稿では、ホエヒンラートナイ村と呼ぶ。後述するホエヒンラートノック村、バユヤム村、及びホエサイカオ村も、行政システム上厳密に言えば「村」ではなく「大字」であるが、本稿では特別な場合を除き、これら3集落をも夫々「村」と呼ぶ。なお、ホエヒンラートナイはタイ語による呼称であり、白カレン族の人々は同村をメーラーキ Meh Lah Ki と呼ぶ。
- 2) ここでは、途上国内途上地域 *underprivileged regions in developing countries* で実施される、「現地支援・ヴォランティア教育」型の、草の根的国際協力活動プログラムを指す。
- 3) 富田・川嶋 (2010)。
- 4) アグロ・フォレストリーは一般に、森林資源の持続的保全と活用に対して十全な配慮の払われている農業生産形態を指す。
- 5) ホエヒンラートナイ村の人口95人のうち、村の若者はムグノ8名、ボサクア9名の計17名を数える。なお、カレン語でムグノは「10歳代後半～20歳代の未婚女性」を、ボサクアは「10歳代後半～30歳代前半の未婚男性」を夫々意味する。
- 6) 富田・川嶋 (2010) は、「村に残る若者の割合が多い」現象について、「他の山村の若者は、近隣の町や中小都市、或いはチェンマイやチェンライ等の大都市で出稼ぎをしていることが多い。これに対し、ホエヒンラートナイ村の若者の多くは、森林保全型農業の生産活動及び採取活動に村内で従事している。村の年長者に、伝統的森林保全意識を次世代に引き継がせようとする強い意向があり、その線にそった施策が実行に移されていることも、若者が村に留まる理由の一つと考えられる」と述べる。
- 7) GONGOVA は、「学習院海外協力研修プログラム Gakushuin Overseas Non-governmental Organization Volunteer Activity Programme」の略称である。草の根的国際協力 NGO ヴォランティア活動プログラムの範疇に属する GONGOVA は、1996年に基本構想が立案され、翌1997年から2010年まで継続的に毎年実施された。同プログラムの主目的は、(1) 参加青年達の自己啓発・自己実現・意識改革の促進、並びに(2) 協力対象地域に於ける生活環境基盤の改善及び熱帯林自然環境の再生・保全である。GONGOVA は2010年8月に最終回のメイ

関する現地調査に基づき、森林保全型農業に対してホエヒンラートナイ村が示す基本姿勢、即ち森林管理哲学について考察することが、本稿の主目的である。

この意図の下に第2章では、「ホエヒンラートナイ村が取り組む森林保全型農業」に触れた資料及び文献について簡単に述べ、その後には本研究のアプローチを概説する。第3章では、森林保全型農業を中心に据えた、同村の農業経済活動を概観する。第4章では、同村に於ける主要換金性作物の一つである茶葉の収穫に関する特質を整理する。第5章では、同村に於けるもう一つの主要換金性作物であるタケノコ採取の特質を整理する。第6章では、第3～5章の考察を踏まえ、同村に居住する村人が共有する森林管理哲学を纏める。

## 1-2 ホエヒンラートナイ村の基本特性<sup>8)</sup>

白カレン族<sup>9)</sup>居住山村であるホエヒンラートナイ村<sup>10)</sup>は、タイ北西部チェンライ県のチェンライ市街地中心部から、車で2時間半の所に位置する。1964年にそれ迄居住していた集落地を離れ、現在の土地に新たな集落を形成した村で、2010年9月現在の世帯数は21戸、人口は95人<sup>11)</sup>を数える。1964年当時の人口規模は、現在の凡そ半分であった。全戸が仏教に帰依し、同時に精霊信仰の祭祀儀礼も継承している。村人は茶や、陸稲及び水稲の栽培、並びにタケノコの採取等、「森林保全型農業」を主たる生業としている。村内のライフ・ラインは必ずしも満足には整備されておらず、夜分は太陽光発電パネルを用いて、2本の細く短かい（約30cm）蛍光灯を灯点燈する。日中十分に晴れていれば、この蛍光灯は数時間つけておくことができる。生活用水は、近くの溪流に設けられた小型堰の取水口から、塩化ビニール・パイプで村内の貯水槽に一旦引かれ、そこから各戸に配水される。携帯電話は通じない。

ホエヒンラートナイ村は、熱帯季節林資源の再生・維持・創出・利活用面で優れた識見と実

---

ン・プログラムを終え、現在は、楽曲で言えばコーダ（終結部）に当たる段階、即ち「1996年以来今日まで積み重ねて来た活動実績をフォロー・アップする作業、及び事後調査等を執り行なう段階」に移行中である。なお、GONGOVAの詳細は、例えば Kawashima and Samata (2002) 及び川嶋 (2009) を参照されたい。

8) 本節は、富田・川嶋 (2010) の第1-2節と重なる部分が多い。

9) カレン族は、チベット・ビルマ語族の一派であり、その主要2グループは白カレン族と赤カレン族である。各グループは夫々下位集団を擁し、白カレン族にはスゴー・カレン族 Sgaw Karen 及びポー・カレン族 Pwo Karen が属し、赤カレン族にはブレー族 Breh 等が属する。白カレン族はミャンマーのカイン Kayin 州を中心に200～300万人が居住する。他方、タイ北西部に定住するカレン族の大半は、ミャンマーから移動して来た人々の子孫であり、現在の人口は凡そ38万人強を数える。翻って、居住地の標高差に目を遣ると、タイに居住するカレン族は、平地カレン族と山地カレン族とに大別される。前者は一般に水稲耕作に従事し、タイ型農耕文化に順応している。後者は、熱帯林の中で定住・循環型焼畑耕作を現在も続けており、独自の民族文化を比較的色彩濃く残している。なおカレン族の宗教は、仏教及び精霊信仰が中心である。しかし、イギリス領インドの一州として旧ビルマが同植民地へ編入された時代に、カレン族の一部ではキリスト教への改宗が進んだ。

10) GONGOVA は、2008年から NGO ヴォランティア活動拠点の一つをホエヒンラートナイ村に置き、コミュニティ・ハウス及び簡易水道施設の整備、村落へのアクセス道路や熱帯林防火パトロール用林道の普請、換金性果実樹木の移植、同樹木の育苗用遮光施設の建設、東洋ミツバチ養蜂農業の導入、及び食用ガエルの養殖等を、同村で支援している。

11) 2010年9月時点で、女46人及び男49人。年齢階層の内訳は、乳幼児6名、小学生15名、中学生5名、実業学校生2名、10歳代後半～20歳代の未婚女性8名、10歳代後半～30歳代前半の未婚男性9名、60歳以上10名、及び、以上のカテゴリーを除いた働き盛りの年頃の大人が40名である（30歳代後半以上の男女は、中高年及び老人を意味する「サブガァ」と呼ばれる）。

績に富む集落として、タイ国内のテレビや雑誌で時折り紹介されている。森林保全型農業を積極的に取り入れている同村はまた、中央・地方政府関連諸機関や内外の NGO 団体との連携に努めると共に、タイ北西部のカレン族居住山村凡そ180ヶ村と、適切な森林環境管理を目的とする協力ネットワークを構築し、その中心的役割を担う。具体的には、チェンライ県やチェンマイ県 Chiang Mai 内の山村や行政機関で教育研究機関からの見学者を多く受け入れ、訪問者を森林保全型農業の「生きた博物館」である同村の共有林 commons に案内し、熱帯季節林が有する自然環境の価値に関する知識の普及、及びカレン族が伝統的に有する森林管理哲学の発信に努めている。

なお、第3章で言及するホエヒンラートノック村<sup>12)</sup>及びパユヤム村<sup>13)</sup>は、ホエヒンラートナイ村と同じ地方末端の行政地区<sup>14)</sup>に属しており、ホエヒンラートナイ村と同様な森林保全型農業を実践している白カレン族居住山村である。

## 2 関連する資料及び文献、並びに本稿のアプローチ

本章では、ホエヒンラートナイ村に関連する資料及び先行研究について触れる。次いで、本稿が適用するアプローチを簡単に説明する。

### 2-1 関連する資料及び文献

ホエヒンラートナイ村の「森林保全型農業」は、第1-2節で触れたように、主にタイ国内の新聞紙上及び雑誌掲載記事、並びに NGO 及び研究諸機関による報告書等で、度々紹介されている。新聞では Konchatlook (2010)、石油公社の環境保全に関する報告書では PTT (2008) を、NGO 報告書では国連開発計画 UNDP とも連携を密にする IKAP-Network 出版の Maruja

- 12) Huay Hin Lahd Nok. 1968年、現在地に集落を形成し、2010年9月現在の世帯数は25戸、人口は126人を数える。また、宗教面での特質を各戸が信仰する宗教別に見ると、キリスト教プロテスタントに帰依している世帯15戸、仏教に帰依し同時に精霊信仰の祭祀儀礼も継承している世帯9戸、及び仏教に帰依している世帯1戸である。なお、同村の土地利用形態等に関する詳細については、第3章を参照されたい。
- 13) Pa Yuyam. 1982年、現在地に集落を形成し、2010年9月現在の世帯数は6戸、人口は33人を数える。また、宗教上の特質は、ホエヒンラートナイ村と同様である。なお、ホエヒンラートナイ、ホエヒンラートノック、及びパユヤムに居住する村人の多くは、互いに縁戚関係にある。また、同村の土地利用形態等に関する詳細については、第3章を参照されたい。
- 14) この行政地区の名称は、「ムー・チェット Moo7 (即ち、第七番村)」である。ムー・チェットには、ホエヒンラートナイ村、ホエヒンラートノック村、及びパユヤム村の3ヶ村に加え、山岳少数民族赤ラフ族の居住山村ホエサイカオ Huay Sai Kao が属する。同村は全世帯キリスト教プロテスタントに帰依しており、世帯数は29戸、人口は128人(女の人数が男の人数よりやや多い)を数える。主な生業は、キャベツ等の野菜栽培(第七番村の助役である同村の長老によると、一部は日本にも輸出されているとのことである)とタケノコ採取である。焼畑農耕は行なっておらず、森林環境は総じて豊かである。但しホエサイカオ村は、第七番村に属する他の上記3ヶ村との日常的な交流は比較的希薄なため、本稿の考察対象からは割愛する。なお、タイの地方行政システムは、タイ語で「チャンワット Jangwad (県 Prefecture) — アンブー Amphur (郡 District) — タムボン Tambon (区 Sub-district) — ムー Moo (村 Standard village) — バン Ban (大字 Small village)」の形で表わせる。これに倣うと、「バンホエヒンラートナイ Ban Huay Hin Lahd Nai」は厳密に言えば、「大字ホエヒンラートナイ」となる。しかし前述した様に本稿では、タイ語「バン Ban」が、通常は一つの集落共同体「村 Large and small villages」を意味することに鑑み、第七番村内の「大字バンホエヒンラートナイ」を「ホエヒンラートナイ村」と呼ぶ。

(2006)<sup>15)</sup>などが、それらの例であるが、そこでは、同村の全域を撮影した航空写真の説明、同村焼畑の休閒農耕システム<sup>16)</sup>に関する図解、及び同村の活用林<sup>17)</sup>に於ける土地利用形態を示す円グラフ等が示され、ホエヒンラートナイ村が有する森林保全意識<sup>18)</sup>及び熱帯林資源管理体制が、概ね好意的に報告されている。これらの資料等は、「森林を適切に保全・活用する同村の自然環境管理姿勢」を、個別具体的に社会へ伝える役割を果たしており、その意味で評価に値する。但し全般的には、森林保全型農業の姿勢を大括みに論ずるに留まっている。

他方、ホエヒンラートナイ村に関する事例研究には、例えば森林入会地 community forest、焼畑農耕 slash-and-burn agriculture (又はswidden)、並びに集水域保全 watershed conservation を巡る研究論文に、夫々 Swit and Wini (1999) 及び Pakorn (2005)、並びに Prasert and Thawong (2005) 及び Akarinn (no-date) がある。

なお、タイの全般的な事柄に関しては、日本タイ学会 (2009) を参照した。

## 2-2 アプローチ

本稿では、「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」に関する現地調査に基づき、森林保全型農業に対して、ホエヒンラートナイ村の村人が共有する基本姿勢を考察する。具体的には、先に述べた3ヶ村<sup>19)</sup>が2010年に共同で作成した、「土地利用形態及び農作物生産に関する詳細な内部資料<sup>20)</sup>」を、ホエヒンラートナイ村の第一指導者プリーチャ・スイリ氏 Preecha Siri、及び同村の熱帯林管理責任者チャイプラサート・ポカ氏 Chaiprasoert Phokha に説明を乞いながら閲読した。併せて、同村の代表的換金性作物である茶葉の収穫及びタケノコの採取に関する「村の農産物収穫・出荷記録帳簿」を、この2種類の農産物の収穫と販売に関するデータを管理する村の責任者から解説を受けながら、詳細に調査した。その上で、これらの資料に拠り森林保全型農業の特質を考察した。

なお本稿を纏めるに当たり、現地フィールド調査は主として第一筆者が執り行ない、研究の構想立案及び段取り設定、並びに得られた資料に基づく考察は、第一筆者と第二筆者が共同で担当した。

15) Maruja (2006) は、ホエヒンラートナイ村の住人に対して、一般に用いられている術語「先住民 natives」とは異なる意味合いの術語「先住民 indigenous people」を当てる。本稿では、この問題には立ち入らない。

16) 「焼畑農耕地 (タイ語で、「ライムンウィアン Rai Mun Wian」) を、原則として一年間以内の作物栽培に当てた後、地力回復のために一定期間作付けせずに休ませてから再び一年間以内使用する仕組み」は、屢々一般に休閒農耕システムと呼ばれる。

17) 陸稲を栽培する焼畑農耕地、水稲を栽培する水田、茶畑、及び竹林等を含む。より詳しくは、第3-1節を参照されたい。

18) この意識の発現を促す基本的知識は屢々「カレン・ナレッジ Karen Knowledge」と呼ばれる。本稿では、「カレン・ナレッジ」を巡る議論に立ち入ることは割愛する。

19) ホエヒンラートナイ村、ホエヒンラートノック村、及びバユム村。

20) Ban Huay Hin Lahd Nai and Two Others (2010)。本内部資料は、2009年4月～2010年1月の間に、ホエヒンラートナイ、ホエヒンラートノック、及びバユムの3ヶ村が共同で、各村に居住する全世帯を対象に実施したアンケート調査の結果を、纏めたものである。本稿では、ホエヒンラートナイ村の第一指導者プリーチャ氏及び同村森林管理責任者チャイプラサート氏から特別な御配慮を載せ、同資料からの引用を許可されたデータを活用した。GONGOVA の諸活動を介して、筆者らがカレン族の人々との間で培った人間関係は、現地調査の実施に対し裨益するところ大であった。

### 3 ホエヒンラートナイ村に於ける森林保全型農業

本章ではまず、ホエヒンラートナイ村の土地利用形態について概説する。次いで、同村に於ける農産物の生産量及び農業カレンダーについて述べる。

#### 3-1 土地利用形態：2008年

2008年現在、ホエヒンラートナイ村の土地総面積は11,299ライ<sup>21)</sup>で、土地利用形態は次の5範疇に分類される。

- (1) 自然林：9,527ライ
- (2) 活用林：1,739ライ
  - ①陸稻栽培用焼畑農耕地<sup>22)</sup>：953ライ
  - ②茶畑及び竹林等：754ライ
  - ③水田：32ライ<sup>23)</sup>
- (3) 集落・寺院：12ライ
- (4) 小学校：11ライ
- (5) 車道・林道：10ライ

同村の人口は95人であるので、一人当りの土地面積は119ライとなる。総面積の84.19%が自然林であり、活用林は15.52%を占める。活用林の大半は、陸稻栽培用の焼畑農耕地、及び茶葉とタケノコの栽培用地に当てられている。

焼畑農耕地について言えば、ホエヒンラートナイ村で適用されている休閒農耕システムの休閒サイクル<sup>24)</sup>は7～11年である。よって、例えば11年の休閒サイクルの場合、或る年に使用した焼畑農耕地は、翌年より10年間に互り休閒地として据え置かれ、11年後には1年間再び農耕

21) 面積を表わす単位。1ライは、0.16 ha (即ち1,600m<sup>2</sup>)を意味する。

22) 1ライの焼畑から収穫できる陸稻は、陸稻が栽培される土地の地味条件・日照条件等により異なり、1ライ当たり40～50ピツ (容積を表わすタイ語の単位「ピツ」は、一斗缶1つ分に当たる凡そ18リットルを表わす) 収穫できる焼畑農耕地もあれば、60～70ピツ収穫可能な焼畑農耕地もある。なお、陸稻1ピツの重量は、12～13 kg であり、タイ北西部の農家が農作物を入れるために通常使う、優に一抱えはある頑丈なビニール紐製網袋の容積は、3ピツである。

23) タイ北西部の山村に於ける水田は、平地の大規模な水田と異なり森林エリアに存在することから、利用形態上活用林に含まれている。ところで、ホエヒンラートナイ村の村民は、この32ライの水田の他に、村外に水田33ライを有する。なお、1ライの水田から収穫できる水稲は土地の諸条件により異なり、年間の収穫量が80～90ピツの水田もあれば、100～150ピツの水田もある。なお、水稲1ピツ当たりの重量は10～11 kg であり、陸稻は水稲に比して籾殻が薄いことも手伝って、水稲よりも重い。単位面積当りのコメの生産性について見ると、水田の方が焼畑農耕地に比して高い。しかしながら、同村の焼畑農耕地の一部では、自家消費用のナス、ウリ及びトウモロコシ等の栽培が、単作、間作、或いは混作の形でなされているので、単位面積当りのコメの生産性によってのみ、焼畑農耕地と水田の地代的価値を単純に比較する訳には行かない。ここでは、この点に関する詳細な検討は避ける。

24) 休閒農耕システムに於ける「農耕地の休閒年数+連続耕作年数 (ホエヒンラートナイ村界限では1年)」は、一般に休閒サイクルと呼ばれる。ホエヒンラートナイ村、ホエヒンラートノック村、及びパユヤム村では、休閒サイクルの長さは各村の村民総会で夫々決定される。

地として活用される。このような農耕形態は、循環型焼畑農業（厳密に言えば、定住耕作者によってなされる循環焼畑農業であるので、定住・循環型焼畑農耕）と呼ばれる。ホエヒンラートナイ村界隈では、7年の休閑サイクルが経験的に理想的であると言われているが、同村はそれを4年上回る休閑サイクルを近年設定している<sup>25)</sup>。この点にも、同村が森林保全型農業の「生きた博物館」と、屢々称される所以が見い出せる。

同村の焼畑農耕地総面積953ライは、以下の11区画に区割りされている<sup>26)</sup>。① 2008年用区画: 89ライ、② 2007年用区画: 82ライ、③ 2006年用区画: 97ライ、④ 2005年用区画: 90ライ、⑤ 2004年用区画: 90ライ、⑥ 2003年用区画: 80ライ、⑦ 2002年用区画: 86ライ、⑧ 2001年用区画: 75ライ、⑨ 2000年用区画: 80ライ、⑩ 1999年用区画: 81ライ、及び⑪ 1998年用区画: 98ライ。2010年は、14世帯が焼畑農耕を行っており、使用合計面積は凡そ50ライである（1世帯当りの使用面積は3~5ライ）。なお2010年現在、休閑期間が7年以上の焼畑農耕地は、300ライを越える。

他方、ホエヒンラートナイ村の東に位置するホエヒンラートノック村では、村の土地面積6,703ライのうち84.26%を自然林が、また14.74%を活用林が夫々占める。活用林は、トウモロコシの栽培地、換金性果実樹木の栽培地、水田、陸稲栽培用の焼畑農耕地、及び家畜放牧地等に利用されている<sup>27)</sup>。なお同村の人口は126人であり、1人当たりの土地面積は53ライとなる。

ホエヒンラートナイ村の北隣りのパユヤム村では、村の土地面積5,130ライのうち84.27%を自然林が、15.61%を活用林が夫々占める。活用林は、陸稲栽培用の焼畑農耕地、茶の栽培地、及び水田等に利用されている<sup>28)</sup>。なお同村の人口は33人であり、1人当たりの土地面積は155ラ

- 25) 休閑年数を長く設定すれば常によい、という訳では必ずしもない。何故なら、焼畑の利用から12~13年の休閑期間を経ると、地力の回復には望ましいが、同期間中に当該地に成長する立ち木の樹幹が太くなり過ぎ、鉋で切り倒す作業が困難になるからである。なお、ホエヒンラートナイ村では、焼畑農耕地の立木伐採の際、チェーンソーは使用されない。
- 26) 焼畑農耕地全体の面積は、防火帯や農道を含む。また各利用区画として表示されている面積（ライ）は、小数点以下が切り捨てられているので、利用区画の合計値は焼畑農耕地全体の面積に必ずしも等しくはない。
- 27) 2008年現在、ホエヒンラートノック村の土地面積6,703ライは、以下の範疇に分類される。(1) 自然林: 5,648ライ。(2) 活用林: 988ライ。① トウモロコシ栽培地: 584ライ、② マンゴー、ラムヤイ及びロンガン等栽培地: 132ライ、③ 水田: 148ライ、④ 陸稲栽培用の焼畑農耕地: 89ライ、⑤ 牛・水牛放牧地: 33ライ。(3) 集落・寺院: 48ライ。(4) 小学校: 2ライ。(5) 車道・林道: 15ライ。焼畑農耕地について言えば、休閑サイクルは7~9年であり、焼畑農耕地総面積89ライは、以下の9区画に区割りされている。① 2008年用区画: 8ライ、② 2007年用区画: 9ライ、③ 2006年用区画: 11ライ、④ 2005年用区画: 18ライ、⑤ 2004年用区画: 8ライ、⑥ 2003年用区画: 12ライ、⑦ 2002年用区画: 17ライ、⑧ 2001年用区画: 6ライ、⑨ 2000年用区画: 4ライ。
- 28) 2008年現在、パユヤム村の土地総面積5,130ライは、以下のよう分類される。(1) 自然林: 4,323ライ。(2) 活用林: 801ライ。① 陸稲栽培用の焼畑農耕地: 545ライ、② 茶の栽培地: 132ライ、③ 水田: 28ライ。(3) 集落・寺院: 5ライ、及び④ 車道・林道: 10ライ。焼畑農耕地について言えば、休閑サイクルは7~8年であり、焼畑農耕地総面積545ライは、2008年現在に於ける記録によると、以下の8区画に区割りされている。① 2008年用区画: 93ライ、② 2007年用区画: 106ライ、③ 2006年用区画: 77ライ、④ 2005年用区画: 62ライ、⑤ 2004年用区画: 52ライ、⑥ 2003年用区画: 42ライ、⑦ 2002年用区画: 98ライ、及び⑧ 2001年用区画: 11ライ。上記⑧区画の循環利用に関しては、若干の説明を要する。例えば、⑧の2001年用区画11ライは、休閑開始後8年目の土地が11ライあることを意味する。しかしこれは、2009年に再び利用される焼畑農耕地の面積が⑧の区画11ライに必ずしも等しい訳ではない。何故ならば、7年以上休閑させた区画は十分に利用可能であると現地では認識されており、例えば、2009年には、「⑧2001年用区画（休閑開始後8年目の土地）11ライに、⑦2002年用区画98ライ（休閑開始後7年目の土地）の一部に当たる40ライを加え、合計51ライを農耕地とし

イとなる。

以上より、村の土地面積に占める自然林及び活用林の割合を、上記3ヶ村間で比較すると次のようになり、3ヶ村が示す数字は、足並みを見事に揃えている。

- (1) ホエヒンラートナイ村：84.19%（自然林），15.52%（活用林）。
- (2) ホエヒンラートノック村：84.26%（自然林），14.74%（活用林）。
- (3) パユヤム村：84.27%（自然林），15.61%（活用林）。

興味深いことに、活用林内で栽培される農作物の種類は3ヶ村の間で、大きく異なる<sup>29)</sup>にもかかわらず、活用林が村の土地面積に占める割合は、何れの村も相似た水準（約15%）を示している。

ところで、先述した、ホエヒンラートナイ村活用林内の水田面積32ライに関して、若干の説明を加えておこう。即ち、同村には村外<sup>30)</sup>に水田を所有する世帯が2戸あり（水田面積33ライ）、ホエヒンラートナイ村の村人が所有する水田の総面積は、村内の32ライと村外の33ライを合わせた、65ライになる。なお村外の水田33ライの内、3ライの水田は、ホエヒンラートナイ村の一世帯が最近購入したものである。他の30ライは、婚姻を契機に同村へ移住した1人の村人が、その後実家の水田を相続したものである。ところで、2008年にホエヒンラートナイ村が生産した水稲23,780 kg<sup>31)</sup>のうち、その26.8%に当たる6,388 kgは、村外にある水田で生産された<sup>32)</sup>。

ここで、水稲栽培の農薬使用に関して一言述べると、ホエヒンラートナイ村の焼畑農耕地で生産される農産物には、化学肥料や除草剤は一切使用されていないと判断してよい。しかし、雑草の処分が容易でない水田はこの限りではなく、ごく少量の化学肥料（タイ語で「ブイ」）や除草剤（タイ語で「ヤ・カ・ヤ」）が使用される年もある<sup>33)</sup>。

なお、ホエヒンラートナイ村の焼畑農耕地では、動力のついた機械等は一切使用されていない。しかし水田では、耕耘機が2008年には1台、2010年には3台使用されている。先祖伝来ではない水田での農法については、近代的な技術の導入に対して比較的寛容であると言える。

---

て利用する」という形の、合筆的土地利用が行なわれ得る。なお、この合筆的土地利用方式は、ホエヒンラートナイ村の焼畑農耕地には殆んど適用されていない。

29) 第3-2節を参照されたい。

30) ウィアンパバオ市近郊のホエマイデュア村 Huay Mai Dua、及びメーチャンカオ村 Mae Chang Kao。両村共に、白カレン族居住山村である。

31) 第3-2節を参照されたい。

32) なお、ホエヒンラートナイ村の村人が、休閒農耕システムが適用されている焼畑農耕地を村外に所有する例はない。ホエヒンラートナイ村の若者の1人は、「山地に居住するカレン族にとって、先祖代々利用してきた焼畑農耕地に対する愛着は、水田に対するものより大きい」と話した。この地域では、平地にある水田の所有権移動が比較的容易であると言われるが、そのことは、この発言によっても間接的に語られている様に思われる。しかしこの点に関して、ここでは立ち入らない。

33) 水田を除く活用林では、農薬や除草剤の類は一切使用されていないことに鑑みると、伝統的に焼畑農耕を生業としてきた白カレン族にとり、水田は例外視される対象になり得るのかもしれない。



### 3-2 農作物の生産量: 2008年

2008年にホエヒンラートナイ村で、生産された、個別農産物の年間総生産量等は、表1の通りである。同表には農産物毎に年間総生産量と併せて、(i) 自家消費量、(ii) 販売量、(iii) 単位当たり売価、及び総収入額が記されている。なお、同表で用いられている通貨単位はTHB<sup>34)</sup>である。

表1 ホエヒンラートナイ村で生産された個別農産物: 2008年

農産物 番号	上段：農産物名 (白カレン語名/タイ語名) 下段：年間総生産量；(i) 自家消費量、(ii) 販売量、(iii) 単位当りの売価、及び (iv) 総収入額
①	陸稲 (ブ・フ/カオ・ライ) 21,910 kg; (i) 20,660 kg (ii) 1,250 kg (iii) THB 6/kg (iv) THB 7,500
②	水稲 (ブ・チ/カオ・ナー) 23,780 kg; (i) 10,450 kg (ii) 5,330 kg (iii) THB 7.5/kg (iv) THB 39,975
③	※ <sup>1</sup> (小木の木の实) (マッコーサ/マッコン) <sup>2</sup> 5,891.5 kg; (i) 402 kg (ii) 5,489.5 kg (iii) THB 20/kg (iv) THB 109,790
④	タケノコ (ボ/ノ・マライ) 25,602 kg; (i) 3,371 kg (ii) 22,231 kg (iii) THB 3~3.5/kg (iv) THB 66,693~77,808.5
⑤	カキ (レコモサ/ブラップ) 1,637 kg; (i) 450 kg (ii) 1,187 kg (iii) THB 10/kg (iv) THB 11,870
⑥	新茶葉 (ナム・ラ・ボ/リョット・チャー・オーン) 6,207 kg; (i) 57 kg (ii) 6,150 kg (iii) THB 10/kg (iv) THB 61,500
⑦	製茶 (⑥とは別に収穫された新茶葉を使用) (ナム・フェー/チャー・ヘーン) 1,048 kg <sup>3</sup> ; (i) 103 kg (ii) 945 kg (iii) THB 80~100/kg (iv) THB 75,600~94,500
⑧	普通茶葉 <sup>4</sup> (ナム・ラ・プガア/バイ・チャー・ケ) 8,500 kg <sup>5</sup> ; (i) 0 kg (ii) 8,500 kg (iii) THB 4/kg (iv) THB 34,000
⑨	乾燥トウガラシ (ムサー・フェー/ブリック・ヘーン) 215 kg; (i) 169 kg (ii) 46 kg (iii) THB 100~150/kg (iv) THB 4,600~6,900
⑩	生トウガラシ (ムサー・シソー/ブリック・ソット) 103 kg; (i) 103 kg (ii) 0 kg (iii) THB - /kg (iv) THB -
⑪	トウヤシ (ヴェー/ワイ) <sup>6</sup> 50 kg; (i) 0 kg (ii) 50 kg (iii) THB 110/kg (iv) THB 5,500
⑫	香辛料 (マケーサ/マックウェン) <sup>7</sup> 280 kg; (i) 32 kg (ii) 248 kg (iii) THB 30~35/kg (iv) THB 7,440~8,680
⑬	ブナ科の木の实 (セサ/マッゴー) <sup>8</sup> 766 kg; (i) 536 kg (ii) 230 kg (iii) THB 13~16/kg (iv) THB 2,990~3,680
⑭	ナス (スコ/マックア) 28 kg; (i) 20 kg (ii) 8 kg (iii) THB 15/kg (iv) THB 120
⑮	ミニトマト (スコチ/マックア・テー) 25 kg; (i) 20 kg (ii) 5 kg (iii) THB 45/kg (iv) THB 225
⑯	※ <sup>1</sup> (ホバヴィ/トゥアブルー) <sup>9</sup> 14 kg; (i) 10 kg (ii) 4 kg (iii) THB 30/kg (iv) THB 120
⑰	マンゴー (スコッ/マムアン) 200 kg; (i) 50 kg (ii) 150 kg (iii) THB 4/kg (iv) THB 600
⑱	オオミツバチ (グネ/ブーン・ルアン) の蜜 50本 <sup>10</sup> ; (i) 17本 (ii) 33本 (iii) THB 150/本 (iv) THB 4,950
⑲	東洋ミツバチ (グエ・ドウ/ブーン・プロン) <sup>11</sup> の蜜 (この農産物のみ2010年のデータ) 20本; (i) 20本 (ii) 0本 (iii) THB - /本 (iv) THB -
合計	- ; (i) - (ii) - (iii) THB - (iv) THB 433,473 ~467,718.5

34) THB はタイ・バーツ Thai Baht を表わす。1バーツは約3円。

〔注〕

- <sup>1</sup> 日本語名を目下調査中。
- <sup>2</sup> カシ類の樹木の実で、ホエヒンラートナイ村では主として活用林内で収穫される。直径20 mmの球形。湯掻いてから堅い殻を割って食する。タンニンを含むため苦味がある。タイ北西部農村地域の食料雑貨店等で、屢々販売されている。
- <sup>3</sup> ホエヒンラートナイ村では、新茶葉から製茶1kgを生産する為に、新茶葉凡そ3~5kgを使用する。従って、新茶葉による製茶1,048 kgが作られた2008年には、凡そ3,144~5,240 kgの新茶葉が、⑥に記載されている新茶葉6,207 kgとは別に収穫されたと考えられる。
- <sup>4</sup> 二番茶、三番茶、番茶の茶葉を併せて、本稿では普通茶葉と呼ぶ。
- <sup>5</sup> この数値は、全世帯21戸中6戸に関するものであり、村落全体を被うデータではない。年度別普通茶葉の収穫総量についての数値として、(1) 2009年末~2010年初の41,092 kg、(2) 2008年末~2009年初の35,376 kg、及び(3) 2007年1月~12月の凡そ30,000 kgがある。ここで(1)及び(2)のデータを用い、夫々の時期に於ける普通茶葉の売価を THB 5.0/kg及び THB 4.5/kgとすると、総収入額は THB 205,462及び THB 159,192となる。なお、茶葉の収穫データ(1)及び(2)の詳細に関しては、第4-2節及び4-3節を参照されたい。
- <sup>6</sup> トウヤシについては例えば、海洋博覧会記念公園管理財団(2009)を参照されたい。同書には、タイ北西部で身近に味わえる果物等が多数紹介されている。
- <sup>7</sup> 潰したニワトリやカエルの肉を調理する際に、匂い消しとして用いられる。
- <sup>8</sup> 種類は多様であり、ドングリ(セ・ポ・ブリッ/ゴ・ドゥーイ)や栗(セ・クロー/ゴ・ベン)に加えて、(セ・グワァ/ゴ・カオ)、(セー・ポー/ゴ・ドゥーイ)、(セ・ロエ/ゴ・レ)、及び(セ・モ・クロ/ゴ・タム)などがある。
- <sup>9</sup> 炒め物等に用いられる。「包皮は厚手で、その鬚は深いインゲン」のような野菜。中でも、長さ20cm程のものが食用として好まれる。
- <sup>10</sup> 蜂蜜を計量する単位は、ウイスキー・ボトル1本分の容積(720 ml)。
- <sup>11</sup> バンホエヒンラートナイ村では、東洋ミツバチの養蜂を導入するプロジェクトが、GONGOVAの支援により2009年から始まっている。現在、村の森林管理責任者チャイプラサート氏を中心となり、東洋ミツバチの巣箱サイズの適性化等の実験が試みられている。

表1が示す様に、ホエヒンラートナイ村の代表的な生業は、陸稲栽培、水稲栽培、茶の栽培(同表の注3~5に留意されたい)、及びタケノコ採取の4つである<sup>35)</sup>。同村が生産する農産物の品種は多く、生トウガラシと東洋ミツバチの蜜を除いた全ての農産物で、村人は収穫物の少なくとも一部を販売し現金収入を得ている。村が必要とするコメ(陸稲及び水稲)の自給率は100%に近く、コメ類の購入は殆んど不要である。それ故に村の実質的な所得水準は名目水準を遥かに上回ると考えられる。

なお、ホエヒンラートナイ村の現金収入には、表1が掲げる農産物以外に、⑳ ウシ・ブタ・ニワトリ等の家畜販売収益; THB 166,500, ㉑ 第七番村の村長職の給与・村長付助役職の給与・区(タムボン)議会議員(オボト)の給与、及びその他の収入; THB 266,500, がある。

以上に加え、研修・視察のために同村を訪れる NGO や研究機関等に所属する人々から徴収

---

35) 生産された陸稲及び水稲が全て市場に出荷されると仮定した場合、2008年に於ける総収入額は夫々 THB 131,460及び THB 178,350となる。また、2009年及び2010年に於ける、タケノコの採取業者全員による総収入額は、夫々 THB 86,785及び THB 126,742であり、2008年末~2009年初及び2009年末~2010年初に於ける、普通茶葉の収穫業者全員による総収入額は、夫々 THB 159,062及び THB 204,541である。なお、2008年の総収入額が109,790バーツに及ぶ「小木の木の实マッコーサ」は、チェンライ市内の業者から受ける注文に随時応じる形で収穫し出荷するため、収益は年毎に顕著に変動する。それ故に村人は、マッコーサを茶葉やタケノコに匹敵する換金性作物としては認識していない。実のところ、全く注文のなかった2009年の出荷実績は0 kgであった。

される、若干の現金収入がある<sup>36)</sup>。ところで、村の第一指導者プリーチャ氏及び森林管理責任者のチャイプラサート氏は、村で行なわれる研修を、自然環境の理解や環境保全に重点を置いた環境教育として位置づけているとともに、彼らが夢見る、「タイ国内外の研究者、政策立案者、及びNGO関係者が滞在し、熱帯林管理の理念と実践を実習し発信できる場である『フォレスト・アカデミー』の設立」を目指すプログラムの、潜在的支援者を育成・開拓する機会として扱っている。この「フォレスト・アカデミー」の本部を山麓のウィアンパオ市内に設立し、その第1支部をホエヒンラートナイ村に置く構想は、有望・有力な国際協力案件として、然るべき検討に値しよう。

翻って、ホエヒンラートナイ村をはじめとする3ヶ村の間で、活用林内で生産される農作物の種類と生産量を比較すると、次のことが指摘される。ホエヒンラートノック村<sup>37)</sup>の主な生業は、水稻栽培及びトウモロコシ栽培の2種類に過ぎない。これに対し他の2村では、トウモロコシ栽培<sup>38)</sup>は殆んどなされていない。他方、パユヤム村<sup>39)</sup>の主な生業には陸稲栽培、水稻栽培、及びタケノコ採取の3種類がある。パユヤム村の農産物生産量は、同村の人口規模が小さいため、ホエヒンラートナイ村及びホエヒンラートノック村の水準に比較して極めて少ない。

- 
- 36) 研修に使用されている主要施設は、GONGOVA 2009の参加学生及び同村の村人が共同で建設した、コミュニティ・ハウスである。同村には、年間凡そ100組に上る研修を目的とする来訪者があり、研修者数は1組数人から50人程度までと幅広い。研修料収入に関する正確な資料は村にないが、先進諸国やタイ国内大都市に居住するNGO職員や研究者が支払う研修料の目安は、昼食付き日帰りでTHB 150、3食付き一泊でTHB 350である。食糧等を持ち込んで自炊するタイの学生やカレン族の人々からは、研修料を徴収しない。研修料は、同村森林管理責任者等によるレクチャー代、活用林内の案内料、及び昼食代（食材購入費・運搬費込み）を含んでTHB 150であるから、上述のNGO職員や研究者にとり格安な値段と言えよう。研修料から経費を除いた純益は、村の共同基金に組み入れられる。同基金は例えば、週に一度の頻度で村外で開催される森林保全関係会議に、村人が参加する際の旅費等の一部に活用される。なお同村は、避暑や娯楽で訪れる人々の入村は、丁寧に断ることにしている。
- 37) ホエヒンラートノック村に於ける2008年の、個別農産物の生産高並びに (i) 生産高のうち自家消費量、(ii) 生産高のうち販売量、及び (iii) 販売量のキロ当たり売価は、次の通りである。① 陸稲: 5,488 kg, (i) 5,488 kg, (ii) 0 kg, (iii) THB-/kg。② 水稻: 64,908 kg, (i) 60,458 kg, (ii) 4,450 kg, (iii) THB10/kg。③ トウモロコシ (ブケサ/カボン): 126,550 kg, (i) 0 kg, (ii) 126,550kg, (iii) THB5/kg。④ タケノコ: 4,310 kg, (i) 3,290 kg, (ii) 1,020 kg, (iii) THB3/kg。及び⑤ 製茶: 25 kg, (i) 25 kg, (ii) 0 kg, (iii) THB-/kg。その他の主な現金収入には、⑥ スイギュウ・ウシ・ブタ・ニワトリ等の家畜販売収益: THB 140,500、及び⑦ 近郊タイ人集落に於ける農業補助労働（稲刈りや脱穀などの手作業）等からの収益: THB 144,765がある。なお、農業補助労働に対する現地の日給相場はTHB 200~220である。
- 38) トウモロコシ栽培用耕地に対してホエヒンラートノック村は、休閒農耕システムを適用しておらず、同一の耕地が毎年繰り返しトウモロコシ栽培に使用されている。ホエヒンラートナイ村では、「トウモロコシ栽培は土地を疲弊させる」という認識を村人が共有している模様である。
- 39) パユヤム村に於ける2008年の個別農産物の生産高並びに (i) 生産高のうち自家消費量、(ii) 生産高のうち販売量、及び (iii) 販売量のキロ当たり売価は、次の通りである。① 陸稲: 6,372 kg, (i) 6,372 kg, (ii) 0 kg, (iii) THB-/kg。② 水稻: 3,930 kg, (i) 3,930 kg, (ii) 0 kg, (iii) THB-/kg。③ 製茶: 391 kg, (i) 71 kg, (ii) 384 kg, (iii) THB 80。④ マッコウサ: 910 kg, (i) 114 kg, (ii) 796 kg, (iii) THB 20/kg。及び⑤ タケノコ: 11,717 kg, (i) 600 kg, (ii) 11,117 kg, (iii) THB3/kg。その他の主な現金収入には、⑥ オオミツバチの蜂蜜販売収益: THB 25,477、⑦ 竹網籠の販売収益: THB 8,040、及び⑧ ウシ・ブタ・ニワトリ等の家畜販売収益: THB 4,610がある。

### 3-3 農作業の年間スケジュール（農業カレンダー）<sup>40)</sup>

ホエヒンラートナイ村で収穫される農産物に関連する年間の作業スケジュールを、農業カレンダーの形で時系列的に表わすと以下の通りである。なお農作物は、① 陸稲、② 水稲、③ 茶葉（新茶葉及び普通茶葉）、④ タケノコ、及び⑤ その他、に分類されている。

- (1) 4月: ① 当年に使用予定の焼畑農耕地に火をかける（チュ・フ／タオ・ライ）。② 特記なし。③ 下旬から新茶葉摘み（デ・ナム・ラ・ボ／パイ・ゲッ・チャー）開始。④ 特記なし。⑤ オオミツバチの蜂蜜採取（ブラア・グネチョ／パツ・アーオ・ナム・プーン・ルアン）。木材の違法伐採監視<sup>41)</sup>。防火帯に於ける「自然発火及び不審火の、自然林及び活用林への延焼」防止の為に監視（定地点型監視及び巡回型監視、毎日）。
- (2) 5月: ① 種初（たねもみ）を播く（プフェ・フ）。1つ1つ掘った小さな穴（直径及び深さともに約8cm）に1穴当たり種初10粒余りを播き入れる。上から土は被せない。この際、トウガラシ、ナス、ウリ、ミニトマト等、凡そ10種類の混作野菜の種、並びにポォボ、ポォゴ等4~5種類の花弁の種計15~20粒が、種初10粒余りと一緒に1個1個の穴に播き入れられる。但し蔓性の野菜の種は、別途独自に播かれる。なお、赤色のケイトウ「ポォボ」と黄色のケイトウ「ポォゴ」は、白カレン族が最も好む花の部類に入り、陸稲の稲刈りや脱穀が終了した後に行なわれる祭祀儀礼で屢々使用される。② 苗床で育苗（プフィ・ドゥカ／ワン・クラァ）。水牛や耕耘機で水田の土をすき起こす（ロ・チ／タイ・ナー）。③ 新茶葉の収穫。④ 特記なし。⑤ 東洋ミツバチの蜂蜜採取（ブラア・グェド・チョ／パツ・アーオ・ナム・プーン・プロン）。オオミツバチの蜂蜜採取。防火帯に於ける「自然発火及び不審火の、自然林及び活用林への延焼」防止の為に監視（定地点型監視及び巡回型監視、毎日）。
- (3) 6月: ① 第1回雑草刈り（クロ・ノー／ターン・ヤー）。② 16日から田植え（ス・ブ／ダム・ナー）開始。③~⑤ 特記なし。
- (4) 7月: ① 第2回雑草刈り。② 田植え。③ 特記なし。④ タケノコ採取（クー・ボ／クッ・ノ）開始。⑤ 特記なし。
- (5) 8月: ① 第3回雑草刈り。② 26日に田植えが終了。③ 特記なし。④ タケノコ採取。⑤ カキの収穫（デ・レコモ／ゲッ・プラップ）。
- (6) 9月: ① 第4回雑草刈り。② 第1回雑草抜き（テー・ノー／トン・ヤー）。③ 第1回雑草刈り（ペー・ナム・ロー／テオ・スワン・チャー）。④ 特記なし。⑤ 小木の木の実の収穫（デ・マッコーサ／ゲッ・マッコン）。
- (7) 10月: ① 稲刈り（ゴ・ブ／ギオ・カーオ）開始。② 第2回雑草抜き。③ 第2回雑草刈り。④ 特記なし。⑤ ブナ科の木の実の収穫（フェー・セサ／ゲ・マッゴー）。
- (8) 11月: ① 稲刈り及び稲抜き（ト・ブ／ヌワット・カオ）。② 稲刈り及び稲抜き。③・④ 特記なし。⑤ ブナ科の木の実（セサ）の収穫。
- (9) 12月: ① 特記なし。② 稲刈り及び稲抜き。③ 普通茶葉の収穫（ナム・ラ・プガァ／

40) Atit (2009) には、同村に於ける焼畑農耕地での作業や、オオミツバチの蜜を採集する作業などを含めたホエヒンラートナイ村の1年の様子が、農業カレンダー風に纏められている。

41) 樹齢の行った大木が、村の部外者により違法に伐採されることが、しばしば生じる。1年を通して月に5~6回の割合で、村の未婚男性「ボサクア」が猟銃を肩に担い交代で盗伐の夜間監視にあたる。

バイ・チャー・ケ）開始。④・⑤ 特記なし。

(10) 1月: ①・② 特記なし。③ 普通茶葉の収穫。④・⑤ 特記なし。

(11) 2月: ①・② 特記なし。③ 普通茶葉の収穫。④ 特記なし。⑤ 防火帯に於ける「自然発火及び不審火の、自然林及び活用林への延焼」防止の為の監視（定地点型監視及び巡回型監視、毎日）。

(12) 3月: ① 当年に使用する焼畑農耕地周囲の防火帯を新たに整備（レ・バ・メウ／タム・ネオ・ガンファイ）。②～④ 特記なし。⑤ 防火帯に於ける「焼畑農耕地にかけた火並びに自然発火及び不審火の、自然林及び活用林への延焼」防止の為の監視（定地点型監視及び巡回型監視、毎日）。

以上のように、ホエヒンラートナイ村の農業カレンダーでは、陸稲及び水稲関連作業の合間に、茶葉、タケノコ、及びその他の収穫作業が置かれる形の、陸稲及び水稲を中心とする森林保全型農業が実施されている。また先述したように同村の農法は、水田でごく少量の除草剤が用いられていることを除くと、基本的には無農薬栽培である。それ故に、雑草刈りの作業に相当の労働力投入が求められている。なお雑草刈りに関して村の森林管理責任者は、「雑草刈りには、農作物の成長を捉し収穫作業を容易にするとともに、雑草による活用林の地力吸収を抑制する目的がある」と、説明する。

#### 4 換金性作物の栽培 (1): 茶葉の収穫<sup>42)</sup>

本章では、村人の主要な現金収入源の一つである茶葉の収穫、就中、しっかりとした記録の残されている普通茶葉<sup>43)</sup>の収穫について、過去2～4年に互るデータを整理し、茶葉の収穫に関する特質を考察する。また、村で行なわれている自家製茶の方法についても触れる。

##### 4-1 茶葉の収穫作業

ホエヒンラートナイ村で収穫される茶葉には2種類あるが、その種類と収穫時期は次の通りである。

一つは新茶葉（カレン語で「ナム・ラ・ボ」、タイ語で「リョッ・チャー」）であり、例年5月に収穫される。村では自家消費用に製茶が行なわれているが、その際に使用される茶葉は専ら「ナム・ラ・ボ」である。もう一つは新茶葉以外の普通茶葉（カレン語で「ナム・ラ・プガア」、タイ語で「バイ・チャー・ケ」）で、例年12月～翌2月にかけて収穫される。普通茶葉は通常村での自家消費には用いられず、専ら製茶されないままの状態業者者に販売される。

ここで、2010～2007年度の収穫作業実施期間、及び収穫作業実施日数について見ると、次の通りである。(1) 2010年には、新茶葉の収穫作業は実施されなかった<sup>44)</sup>。理由は、焼畑農耕地での作業が繁忙であったため予定通りに茶摘み作業に移ることができず、その間に新芽が過剰

42) 本章は、ホエヒンラートナイの村人サンヴォーン・スィリ氏 Sanguaon Siri 及び同氏のモー夫人が保管する「普通茶葉収穫・出荷記録帳簿」によるところが大きい。

43) 他の農作物との比較で見られる普通茶葉の年間収穫量（2008年度）については、第3-2節を参照されたい。

44) 自家消費用の新茶葉収穫量はこのデータには含まれていない。2010～2007年の場合、茶摘み作業は毎年5月に実施された。

に生育してしまったことによる。この点に関して同村の森林管理責任者は、「自分達（同村の村民及び近隣の村に住む親類縁者）の労働力にのみ頼り、且つ肉体的に過度な無理をすることなく茶摘みをする基本姿勢を村人は大切にしているので、他村や麓の町から労働力を雇用して茶の収穫作業を進めることは、原則としてない」と語っている。この「利潤・収入を最大化する基準に必ずしも囚われない原則」は、知足（足るを知る）の姿勢が、同村の生活の肝要な底流をなしていることを物語っている。他方、2010年末からの普通茶葉の収穫作業は、同年12月～2011年2月に実施予定である。(2) 2009年の新茶葉収穫作業も、2010年同様に実施されなかった。理由は、4月下旬の電害で茶の新芽が壊滅的な打撃を受けたためである。普通茶葉の収穫作業は、2009年12月6日～2010年2月13日の期間に、計38日間実施された。(3) 2008年の新茶葉収穫作業は、5月に実施された<sup>45)</sup>。普通茶葉の収穫作業は、2008年12月21日～2009年2月20日の期間に、計39日間実施された。(4) 2007年の新茶葉収穫作業は、5月に実施された<sup>46)</sup>。普通茶葉の収穫作業は、2007年12月～2008年2月の期間に実施された<sup>47)</sup>。

ホエヒンラートナイ村に於ける、普通茶葉の総収穫量及び収穫作業員全員の総収入額は、2009年末～2010年初が夫々41,092 kg 及び THB 204,541、並びに2008年末～2009年初が夫々35,736 kg 及び THB 159,062であった。普通茶葉はこの様に、比較的安定的な高収入を村に毎年齎している。

なお茶葉のキロ当たりの標準売価<sup>48)</sup>は、新茶葉の場合例年 THB 10/kg であり、普通茶葉は2010年初が THB 5.50/kg、2009年及び2008年はともに THB 5.00/kg であった（但し、2009年末は一時 THB 5.20/kg のことがあった）。なお、普通茶葉のキロ当たりの収入は、村内で次のように配分される。2010年の THB 5.50/kg については、①収穫作業員の収入: THB5.00/kg、②メーカーチャン市内の製茶業者迄の運搬費（ガソリン代込み）: THB 0.30/kg<sup>49)</sup>、③茶葉の市場への運搬係りサンヴォーン氏への報酬: THB 0.20/kg、及び④ THB 僅少<sup>50)</sup> /kg; 同村共同基金への納入。また、2009年及び2008年の THB 5.00/kg については、次の通りであった。即ち、① THB 4.50/kg、② THB 0.30/kg、③ THB 0.20/kg、及び④ THB 僅少 /kg。

#### 4-2 普通茶葉の収穫に関するデータ (1): 2009年末～2010年初

詳細な記録が残されている2009年12月から2010年2月に亙る普通茶葉の収穫作業に関するデータを整理し、その結果表2を得た。同表には、収穫作業日、収穫作業人数、収穫作業員全員による総収穫量、当該作業日の収穫が最小であった個人の収穫量及び最大であった個人の収穫量、並びに収穫作業員全員による総収入額が、年月日別に示されている。なお、2010年1月4

45) 詳細な実施期間及び合計作業日数に関するデータは存在しない。

46) 詳細な実施期間及び合計作業日数に関するデータは存在しない。

47) 詳細な実施期間及び合計作業日数に関するデータは存在しない。

48) 売価は毎年（時によっては日毎に）変動する。帳簿の誤記載も時にあるが、その場合には後日に個別に修正され、適切な調整金額が収穫作業員に支払われる。ただし、修正された記録は、残されていない。

49) 茶葉は比重が比較的小さいので、村の第一指導者プリーチャ氏が管理する村の共有車で市場へ運搬される。他方、タケノコの比重は比較的大きいので、村の共有車より載積能力の高い、第七番村の村長スウォン・プライワクン氏 Thwong Praiwagol の所有車及び村長付き助役ソクラン・レポー氏 Songkhran Lekpho の所有車が使われる。

50) 例えば、村の共有車に前もってガソリンが十分に入っている場合には、ガソリンを新たに購入する必要はない。この際、運搬のために用意しておきながら不要になったガソリン代は、村の共同基金に納入される。

日から2月13日に亙る期間の実働作業日（22日間）に対する数値には、隣村パユヤムの村人が行なった収穫作業に関するデータが含まれている。また、「普通茶葉収穫・出荷記録帳簿」担当者サンヴォーン氏によると、2009年12月14日の総収入額の計算には、標準単価の適用ミスがあった。

表2 ホエヒンラートナイ村に於ける普通茶葉の収穫：2009年末～2010年初

作業日 番号	収穫作業日	収穫作業人数	収穫作業者全員による総収穫量（括弧内は、 当該作業日の収穫が最小であった個人の収 穫量～最大であった個人の収穫量）	収穫作業者全員 による総収入額
①	2009年12月 6日（日）	17人	549 kg（10kg～74kg）	THB 2,468
②	2009年12月11日（金）	14人	1,051 kg（16kg～175kg）	THB 4,845
③	2009年12月13日（日）	6人	429 kg（15kg～92kg）	THB 1,965
④	2009年12月14日（月）	14人	802 kg（10kg～112kg）	THB 3,475
⑤	2009年12月15日（火）	12人	723 kg（21kg～114kg）	THB 3,527
⑥	2009年12月17日（木）	20人	1,451 kg（23kg～176kg）	THB 7,250
⑦	2009年12月18日（金）	20人	1,521 kg（12kg～164kg）	THB 7,565
⑧	2009年12月19日（土）	22人	1,369 kg（8kg～161kg）	THB 6,845
⑨	2009年12月20日（日）	21人	1,417 kg（10kg～156kg）	THB 7,105
⑩	2009年12月21日（月）	23人	1,452 kg（10kg～132kg）	THB 7,260
⑪	2009年12月22日（火）	20人	1,326 kg（11kg～137kg）	THB 6,636
⑫	2009年12月23日（水）	24人	1,794 kg（9kg～180kg）	THB 8,970
⑬	2009年12月25日（金）	22人	1,645 kg（22kg～206kg）	THB 8,292
⑭	2009年12月26日（土）	16人	1,047 kg（31kg～127kg）	THB 5,235
⑮	2010年 1月 1日（金）	7人	421 kg（21kg～103kg）	THB 2,105
⑯	2010年 1月 2日（土）	15人	1,324 kg（18kg～181kg）	THB 6,620
⑰	2010年 1月 3日（日）	19人	1,382 kg（7kg～147kg）	THB 6,910
⑱	2010年 1月 4日（月）	※ <sup>1</sup> 人	1,683 kg（※kg～※kg）	THB 8,415
⑲	2010年 1月 5日（火）	※人	1,960 kg（※kg～※kg）	THB 9,800
⑳	2010年 1月 6日（水）	※人	2,079 kg（※kg～※kg）	THB 10,395
㉑	2010年 1月 7日（木）	※人	1,278 kg（※kg～※kg）	THB 6,390
㉒	2010年 1月 8日（金）	※人	255 kg（※kg～※kg）	THB 1,275
㉓	2010年 1月11日（月）	※人	2,181 kg（※kg～※kg）	THB 10,905
㉔	2010年 1月12日（火）	※人	2,207 kg（※kg～※kg）	THB 11,035
㉕	2010年 1月15日（金）	※人	537 kg（※kg～※kg）	THB 2,685
㉖	2010年 1月16日（土）	※人	780 kg（※kg～※kg）	THB 3,900
㉗	2010年 1月18日（月）	※人	1,004 kg（※kg～※kg）	THB 5,020
㉘	2010年 1月19日（火）	※人	946 kg（※kg～※kg）	THB 4,730
㉙	2010年 1月20日（水）	※人	801 kg（※kg～※kg）	THB 4,005
㉚	2010年 1月21日（木）	※人	987 kg（※kg～※kg）	THB 4,935
㉛	2010年 1月22日（金）	※人	412 kg（※kg～※kg）	THB 2,060
㉜	2010年 1月24日（日）	※人	648 kg（※kg～※kg）	THB 3,240
㉝	2010年 1月25日（月）	※人	104 kg（※kg～※kg）	THB 520
㉞	2010年 2月 1日（月）	※人	286 kg（※kg～※kg）	THB 1,430
㉟	2010年 2月 4日（木）	※人	690 kg（※kg～※kg）	THB 3,450
㊱	2010年 2月 7日（日）	※人	890 kg（※kg～※kg）	THB 4,450
㊲	2010年 2月11日（木）	※人	1,605 kg（※kg～※kg）	THB 8,025
㊳	2010年 2月13日（土）	※人	157 kg（※kg～※kg）	THB 785
合計	38日間	(延べ292人 <sup>2</sup> )	41,092 kg <sup>3</sup> (254kg～2,437kg) <sup>4</sup>	THB 204,541

〔注〕

- <sup>1</sup> 「※」印は、数値不詳。  
<sup>2</sup> 2009年12月6日～2010年1月3日の数値の合計。  
<sup>3</sup> 2009年12月6日～2010年1月3日の合計は19,703 kg。  
<sup>4</sup> 括弧内の数値は二つとも、2009年12月6日～2010年1月3日の数値の合計。

表2が示す様に、普通茶葉の収穫を12月6日～1月3日の期間（全期間の45%に当たる）について見ると、収穫作業延べ人数は292人を数え、収穫作業者全員による総収穫量は19,703 kgである。従って、同期間に於ける収穫作業者1人1日当りの平均収穫量は67.5 kgとなる。また個人による最小収穫量の1日当り平均は14.9 kg、個人による最大収穫量の1日当り平均は143.4 kgである。<sup>51)</sup> 更に、収穫作業者全員による全期間（38日間）の総収穫量は41,092 kgであり、総収入額は THB 204,541<sup>52)</sup> であるので、収穫作業者の全期間を通じた収入単価の平均は THB 5.0となる。

#### 4-3 普通茶葉の収穫に関するデータ (2): 2008年末～2009年初

先ず、詳細な記録が残されている2008年12月から2009年2月に互る普通茶葉の収穫作業に関するデータを整理し、その結果表3を得た。同表には、収穫作業日、収穫作業人数、収穫作業者全員による総収穫量、当該作業日の収穫が最小であった個人の収穫量及び最大であった個人の収穫量、並びに収穫作業者全員による総収入額が、年月日別に示されている。

表3 ホエヒンラートナイ村に於ける普通茶葉の収穫: 2008年末～2009年初

作業日 番号	収穫作業日	収穫作業人数	収穫作業者全員による総収穫量（括弧内は、当該作業日の収穫が最小であった個人の収穫量～最大であった個人の収穫量）	収穫作業者全員による総収入額
①	2008年12月21日（日）	12人	573 kg（28 kg～75 kg）	THB 2,578
②	2008年12月22日（月）	10人	505 kg（17 kg～122 kg）	THB 2,272
③	2008年12月23日（火）	16人	1,004 kg（11 kg～168 kg）	THB 4,518
④	2008年12月24日（水）	11人	809 kg（11 kg～177 kg）	THB 3,673
⑤	2008年12月25日（木）	23人	1,018 kg（11 kg～172 kg）	THB 4,581
⑥	2008年12月27日（土）	15人	776 kg（10 kg～89 kg）	THB 3,488
⑦	2008年12月28日（日）	23人	1,404 kg（8 kg～165 kg）	THB 6,313
⑧	2009年1月1日（木）	7人	679 kg（29 kg～210 kg）	THB 3,055
⑨	2009年1月2日（金）	19人	1,239 kg（11 kg～196 kg）	THB 5,571
⑩	2009年1月4日（日）	14人	943 kg（11 kg～92 kg）	THB 4,298
⑪	2009年1月5日（月）	17人	1,024 kg（13 kg～166 kg）	THB 4,605
⑫	2009年1月6日（火）	15人	732 kg（7 kg～109 kg）	THB 3,290
⑬	2009年1月7日（水）	14人	676 kg（12 kg～109 kg）	THB 3,039
⑭	2009年1月8日（木）	15人	886 kg（10 kg～191 kg）	THB 3,985
⑮	2009年1月9日（金）	10人	541 kg（6 kg～118 kg）	THB 2,452

51) これら3種類の平均値の算出には、2009年12月6日から2010年1月3日迄の期間に対するデータを用いた。  
 52) 38日の全期間に互る、ホエヒンラートナイ村の作業者全員による総収入額は、パユヤム村の作業者数の収穫量を勘案して推定しなくてはならない。村人の「普通茶葉収穫・出荷記録帳簿」担当者サンヴォーン氏の推定によると、ホエヒンラートナイ村に於ける2010年度の普通茶葉収穫作業に関しては、「(ii) 収穫作業者全員による総収穫量は 34,510kg, (iii) 作業者全員による総収入額は THB 169,506」となる。



「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」現地調査（富田、川嶋）

⑬	2009年 1月11日 (日)	13人	688 kg ( 5 kg ~ 178 kg)	THB 3,094
⑭	2009年 1月12日 (月)	13人	644 kg ( 14 kg ~ 97 kg)	THB 2,894
⑮	2009年 1月13日 (火)	12人	454 kg ( 10 kg ~ 100 kg)	THB 2,040
⑯	2009年 1月14日 (水)	4人	165 kg ( 18 kg ~ 75 kg)	THB 742
⑰	2009年 1月15日 (木)	10人	376 kg ( 19 kg ~ 60 kg)	THB 1,690
⑱	2009年 1月19日 (月)	17人	894 kg ( 23 kg ~ 105 kg)	THB 4,018
⑳	2009年 1月20日 (火)	23人	1,387 kg ( 11 kg ~ 115 kg)	THB 6,234
㉑	2009年 1月21日 (水)	31人	1,864 kg ( 17 kg ~ 136 kg)	THB 8,380
㉒	2009年 1月22日 (木)	21人	1,422 kg ( 9 kg ~ 143 kg)	THB 6,389
㉓	2009年 1月23日 (金)	26人	1,645 kg ( 7 kg ~ 166 kg)	THB 7,399
㉔	2009年 1月24日 (土)	17人	989 kg ( 10 kg ~ 165 kg)	THB 4,446
㉕	2009年 1月26日 (月)	23人	1,313 kg ( 10 kg ~ 118 kg)	THB 5,902
㉖	2009年 1月27日 (火)	20人	860 kg ( 10 kg ~ 129 kg)	THB 3,864
㉗	2009年 1月28日 (水)	19人	852 kg ( 8 kg ~ 107 kg)	THB 3,815
㉘	2009年 1月29日 (木)	26人	1,380 kg ( 18 kg ~ 158 kg)	THB 6,202
㉙	2009年 1月30日 (金)	24人	1,258 kg ( 12 kg ~ 95 kg)	THB 5,656
㉚	2009年 1月31日 (土)	24人	1,590 kg ( 22 kg ~ 169 kg)	THB 7,099
㉛	2009年 2月 1日 (日)	22人	1,319 kg ( 11 kg ~ 123 kg)	THB 5,932
㉜	2009年 2月 3日 (火)	19人	963 kg ( 7 kg ~ 104 kg)	THB 4,329
㉝	2009年 2月 4日 (水)	16人	908 kg ( 10 kg ~ 105 kg)	THB 4,080
㉞	2009年 2月 5日 (木)	8人	334 kg ( 12 kg ~ 78 kg)	THB 1,501
㉟	2009年 2月 6日 (金)	1人	30 kg ( 30 kg ~ 30 kg)	THB 135
㊱	2009年 2月10日 (火)	12人	604 kg ( 10 kg ~ 162 kg)	THB 2,716
㊲	2009年 2月20日 (金)	9人	628 kg ( 9 kg ~ 82 kg)	THB 2,823
合計	39日間	延べ 631人	35,376 kg (507 kg ~ 4,959 kg)	THB 159,062

表3が示す様に、普通茶葉収穫期間中の収穫作業延べ人数は631人を数え、収穫作業者全員による総収穫量は35,376 kgであり、収穫作業者全員による総収入額はTHB 159,026である。従って収穫作業者1人1日当たり平均収穫量は56.1 kgとなり、収穫作業者1人1日当たりの平均収入額はTHB 252.1となる。<sup>53)</sup> また、最小収穫量の1日当たり平均は13.0 kg、最大収穫量の1日当たり平均は127.2 kgである。なお、収穫作業者の収入単価平均は、THB 4.5となる。

#### 4-4 茶葉の収穫に関する村人の共有認識

ホエヒンラートナイ村の村人は、茶葉の収穫に関して、次の認識を共有しているように思われる。

- (1) 村人は、全ての茶の木及びそれらがつける茶葉を共有する。
- (2) 村人は、村内の茶畑を一定区画毎に分けて、各区画を個別に管理する。
- (3) (1)及び(2)に関する補則: 全ての村人は、茶畑全ての個別管理区画で、茶葉を収穫する権利を持つ。
- (4) (3)に関する補足 (イ); 慣例として (個別管理者への優位性付与として)、収穫効率を上げるために任意の個別管理者 A とその手伝いをする村人数名はグループを組み、A の個

53) 2007年末～2008年初の普通茶葉収穫量の合計は、凡そ30,000 kg、収穫作業者全員による期間内収入額合計は凡そTHB 135,000と、推定されている。

別管理区画内で茶葉の収穫作業にあたることができる<sup>54)</sup>。

- (5) 収穫作業期間は、月1度の頻度で通常開催される村人の全員総会で決定される。
- (6) 収穫作業期間前の数か月間に、茶の木の下草狩りを4回程度共同で実施する。
- (7) 茶の木の栽培には、化学肥料及び除草剤は一切使用しない。
- (8) 身体に無理をし過ぎないように配慮して、茶葉収穫の労働作業にあたる。

#### 4-5 自家製茶法

本節では、ホエヒンラートナイ村で行なわれている製茶作業の段取りについて説明する。本節で示す製茶作業の過程や器具の名称は、日本語表記の後の括弧内に白カレン語／タイ語の順で示す。なお、後述する鉄製の釜及び特殊な碾臼（ひきうす）の金具部品を除き、村で使用されている製茶用の道具は全て村人の手製である。

- (1) 新茶葉を摘む（デ・ナム／ゲップ・チャー）：5～6kgの生茶葉（ナム・シソー／ヂョ・チャー・ソット）を収める籠（グッ／ガブン）を背負って茶畑に行く（レ・ナム・ロ／パーイ・スワン・チャー）。村人は通常、昼食を挟んで午前及び午後1回ずつ茶畑に出る。1日の収穫量は一般に、作業者1人当たり10～12kgである。村人は、自家製茶に良質の新茶葉<sup>55)</sup>（ナム・ラ・ボ／ヂョ・チャー・オン或いはバイ・チャー・ヌ）を用いるのが普通であり、例外的に普通茶葉を用いる。新茶葉を摘む枝の箇所は、1枚の新芽と3枚の新葉からなる部分（アラ・ボ・スペ・ア・ゾ・ボ／サン・バイ・ヌン・ヨン）で、枝の先端約8cmの部分である。この箇所の葉は特に柔らかく黄緑色を呈している。
- (2) 収穫した新茶葉を軽く煎る（ヴェ・ナム或いはクエ・ナム／コア・チャー）：鉄製の釜（ガタ／モカ）を据える煉瓦製の炉に、火回りの早い乾いた古竹を焼べる。釜は、大きいもので直径96cm×深さ25cm、これよりやや小さなもので直径86cm×深さ24cm。釜を載せた炉の高さは大きなもので63cm、小さなもので55cm。新茶葉を煎る時間の目安は、片手一掴み分の茶葉には3分、台所鍋いっぱい分の茶葉には15～20分。その際、長さ凡そ30cmの包丁状の器具（タ・クエ・ナム／マイ・クワ・チャー）2本を用いて、攪拌しながら煎る。煎り終えた茶葉は、竹籤で粗く編んだ直径55cm×40cmの盆（ファ／ダックラー）に載せて、煎った茶葉を揉む器械まで運ぶ。
- (3) 新茶葉を揉む（リッ・ナム／モオ・チャー）：茶葉を碾臼に似た専用の器械で粗く碾（ひく）（タアリッ・ナム／クラノアツ・チャー）。この器械（モオ／ティ・ヌアツ・チャー）の形は、例えば、4脚の正方形テーブルAの上に同じサイズの正方形の木枠Bを載せ、Bの中心に直径34cm×深さ28cmの底の無い桶を置いた形である。テーブルの高さは80cm、正方形の一辺は80cmである。BはAに金属器具で4カ所留められており、BとAの間には若干の間隙が設けられている。Bは一般的な碾臼の上部に似た働きをする。実はBと

54) 茶の木は活用林内に十分に繁茂しているため、村人各自が管理する区画の範囲を越えた場所で茶葉を摘む時間的ゆとりがないのが現状である。

55) 普通茶葉（日本茶でいうところの、二番茶、三番茶、番茶を作るために用いられる茶葉）は、白カレン語で「ナム・ラ・プガア」、タイ語で「バイ・チャー・ケ」という。普通茶葉は、葉の付いた枝の先端から60～80cmまでの部分を、手袋をはめた手で枝先へ向けてこそげ取る様にして収穫する。長さ30cmの一枝当たり、普通茶葉が100～300枚採取できる。

A を繋ぐ器具の留め方に特別な仕組みが施されており、B は A の上で大きな円を描く。茶葉は底を外した桶に深さ23cm を目安に入れられ、桶に被せる木の板の重みと、A の中心部から放射線状に付けられている突起との間で擦られであり、揉まれる。左右に100回ずつ碾き回すと優れた味が出る。以上(2)及び(3)の過程は、専用の製茶小屋（ナム・デ／ドゥロンクワ・チャー）で行なわれる。木材と竹で建てられているこの小屋の大きさは、間口525cm × 奥行795cm × 高さ330cm である。

(4) 新茶葉を乾かす（ローロ・ナム／タツ・チャー）:

①晴天の場合: 間口400cm × 奥行300cm の、竹で組んだ長方形の台（タ・ローロ・コー／ティ・タツ・チャー）の上に茶葉を敷き詰め、9～10時間日光に晒して乾かす。高さ65cm の台は、200cm の柱8本により支えられている。台から135cm 突き出ている各柱の外側には、ニワトリの侵入を防ぐネットを張る。台の上には、「竹に鉋で縦の裂け目を入れながら一枚の板状に叩き延ばした竹簧（すのこ）（ピダ／マイ・ファー）」を、8枚敷く。

②雨天の場合: コンクリート・ブロックをセメントで固めた、縦246cm × 横122cm × 高さ60cm の直方体の炉（ター・サア・クエ・ナム・ロ／ティ・ヤーン・チャー）に、古い竹を焼べ、炉の上に茶葉を敷き詰めて1～2時間乾かす。

(5) 製茶（ナム・フェー／チャー・ヘーン）作業の完了: 3～5kg の生茶葉から凡そ1kg の製茶ができる（生茶葉は雨天のとき重さが増え、晴天のとき減る）。新茶葉の収穫作業期間中に製茶作業を行なう村人は、1人当たり平均約30 kg の新茶を製造する。仕上がった新茶は、主として自家消費用に貯えられ、食後や来客時に喫茶される。余剰分は、茶葉の買い付け業者が村に来たときに、キロ当たり80～100バーツで販売される。

## 5 換金性作物の栽培 (2): タケノコの採取<sup>56)</sup>

本章では、茶葉と並んで村人の主要な現金収入源の一つであるタケノコの採取について、2010～2008年のデータを整理し、タケノコの採取に関する特質を考察する。

### 5-1 タケノコの採取作業

本節では、タケノコ採取作業と採取後の一次加工階段までの流れを概説する。ホエヒンラートナイ村に生育する竹は10種<sup>57)</sup>を数えるが、業者に販売する目的で採取される品種は、タケノコが大型で且つ味の良い竹ヴァ・クルツである。ヴァ・クルツの親竹は、根本（稈基）に3対の芽子（がく）を有する（第5-5節の図1を参照されたい）。これらの芽子から夫々1本づつタケ

56) 本章は、ホエヒンラートナイ村の住人ニウエ・スイリ氏 Niwet Siri が保管するタケノコ関係帳簿によるところが大きい。資料はニウエ氏の許可を得て転記した。なおニウエ氏との主要インタヴューは彼の自宅に於いて2010年9月6日(月)に行なわれた。

57) この10竹種をカレン語の名称（括弧内はタイ語の名称）で示すと、次の通りである。ヴァ・クルツ（タイ・ホック）、ヴァ・ミー・ボ（タイ・サン）、ヴァ・ミー・ス（タイ・サン・ダム）、ヴァ・クレー（タイ・ライ）、ヴァ・ター（タイ・ホー）、ヴァ・ブロー（タイ・カオラーン）、ヴァ・クロー（タイ・ヒア）、及びヴァ・ボ（タイ・モン）。なお、ヴァ・ブローの眞稈の空洞部分（即ち竹筒の内部）は、モチ米を炊く際に使われることがある。また、ヴァ・クローの眞稈は細かく裂いて、建材を繋ぐ竹鐵に加工する。

ノコが伸びるが、まず真稈に最も近い最上部（稈基の第1層）についている芽子対のうち、一つの芽子から1本のタケノコが育つ。これを採取すると、もう一つの芽子からタケノコが出る。これも採取すると次は稈基第2層の芽子対のうちの一つの芽子から、タケノコが育つ。これも採取するともう一つの芽子からタケノコが出る。この様にして1シーズンに1本の親竹から4本のタケノコを採取する。但し、その後第3層の芽子対から成長する2本のタケノコは、採取せずに残す。これは、翌年の発筍を担保するためである。同様なことは、村人達によるオオミツバチ（野生）の蜂蜜採取に対しても指摘できる。即ち、この村及び隣村パユヤム村のハニーハンターの数は合計4人（現在はホエヒンラートナイ村から3人、パユヤム村から1人）と取り決められており、蜜の採取に当たりハニーハンターは、高木の横枝にかけられたオオミツバチの巢のほんの一部を切り取るだけで他は全て残し、将来の蜜蜂採取を担保することが為来りになっている。

ところでタケノコの採取に当たっては、先端に長さ20cmの金属片を取り付けた柄の長さ160cmの専用棒で掘り起こす<sup>58)</sup>。その際、最下部（稈基第3層）の芽子1対は採取しない。何故なら稈基第3層の芽子対の部分迄採取すると、その採取痕がネズミ、リス、ガの幼虫、昆虫等により傷つけられたり、風雨の浸食を受けることにより、親竹が衰弱するからである。

村人各自が活用林で採取したタケノコは、竹籠等に入れられ、村の中に1カ所ある「タケノコの茹で場」に運ばれる。タケノコの皮は、活用林内で既に全て剥がされている。茹で場には、2本のドラム缶（ともに直径59cm、高さ78cm）を再利用した、タケノコを茹でる容器が設置されており、中には90℃前後の熱湯が湧かされている。タケノコ収穫責任者のニウエ氏又は彼の作業補助者（村人）は、村人が運び込むタケノコの重さを計量した後、それらを熱湯の中に入れ20～30分間茹でる<sup>59)</sup>。茹でられたタケノコ<sup>60)</sup>は、コンクリート製の水槽（縦230cm×横178cm×高さ76cm）に張られた水に浸して急冷する。十分に冷やしたタケノコは、柄の長さが140cmの掬い上げる道具<sup>61)</sup>で冷水から取り出し、ビニール紐で編まれた網袋（容積は一斗缶凡そ3本分）に小分けにして収める。熱湯でタケノコを茹でる作業は、昼過ぎから開始されるが、収穫されたタケノコは全て収穫当日の夕方迄に茹でられ、日没前に山麓の町（行政制度上は市）バンパープアへ、ピックアップ・トラック2台で出荷される。

ここで、ホエヒンラートナイ村に於けるタケノコの、収穫作業実施期間及び作業実施日数を示すと、次の通りである。(1) 2010年は、7月27日(水)～8月28日(土)の間に計21日間。(2)

---

58) カレン語（括弧内はタイ語）では、タケノコを掘り起こすことを、クー・ボ（ク・ノー）、タケノコを掘り起こす専用棒はポー（シラム）、タケノコを茹でることはクロー・ボ（トム・ノー）と言う。なお、タケノコが小さいときに、ガの幼虫「キーフェ（白カレン語）／ロッドゥアン（タイ語）／デェ（北タイ語）／ロムチュ（中国語）」が寄生することがある。タケノコが親竹に成長するにつれキーフェの体長は大きくなり、10月から翌年6月の期間に食用として好まれる。キーフェはタイ北部では重要な食材の一つであり、最近では1kgがTHB 100で取引される。なお、キーフェの群れに寄生された真稈は変色し、著しく痛む。

59) 採取したタケノコを20～30分間茹でる主な理由は次の通りである。(1) 出荷時の破損を防ぐ（生のままでは脆く欠け易いが、茹でることによって弾力性が増し、輸送中にタケノコがぶつかり合っても破損し難くなる）。(2) 腐敗を防ぐ（日持ちを良くする）。茹でることにより保存期間をそうでない場合に比べて2～3日延ばすことができる。(3) 付着しているイモムシ類を死滅させる。(4) 鮮度を保つ（特に、匂いの良い状態を長期間保持できる）。それ故に、茹でていないタケノコの売価は、低い。

60) 平均的な大きさは1.1 kg、特に大きいもので7.5 kg、及び特に小さいもので0.2 kgである。

61) 大きな匙状を呈する頑丈な掬い網（直径30cm）が、木製の柄の先端に取り付けられている。

2009年は、7月8日(火)～8月18日(火)の間に計30日間。及び、(3) 2008年は、7月20日(日)～8月26日(火)の間に計24日間。

ホエヒンラートナイ村に於ける年別のタケノコ総採取量及び村人のタケノコ販売による総収入額は、2010年が31,687 kg 及び THB 126,742, 2009年が24,790 kg 及び THB 86,785, 並びに2008年度が20,122 kg 及び THB 70,400であった。この様にタケノコは、茶葉と同様に比較的に安定的な高収入を村に齎している。なお、タケノコのキロ当たり売価は、2010年が THB 7.0/kg, 2009年及び2008年が THB 6.5/kg であった。なお、村人がタケノコ販売により得られる収入は次のように配分される。2010年の THB 7.0/kg は、① 収穫作業者の収入: THB 4.0/kg, ② ウィアンパパオ市内の業者までの運搬費 (ガソリン代込み): THB 1.6/kg, ③ ニウエ氏の収入 (タケノコを茹でる作業及び冷却作業の代金): THB 1.2/kg, 及び④ 村の共同基金への納入: THB 0.2/kg であった。また、2009年及び2008年の THB 6.5/kg は、① THB 3.5/kg, ② THB 1.6/kg, ③ THB 1.2/kg, 及び④ THB 0.2/kg であった。

### 5-2 タケノコの採取に関するデータ (1): 2010年

詳細な記録が残されている2010年度のタケノコ採取作業に関するデータを整理し、その結果表4を得た。同表には、採取作業日、採取作業人数、採取作業者全員による総採取量、当該作業日の採取が最小であった個人の採取量及び最大であった個人の採取量、並びに採取作業者全員による総収入額が、年月日別に示されている。

表4 ホエヒンラートナイ村に於けるタケノコの採取: 2010年7月～8月

作業日 番号	採取作業日	採取作業人数	採取作業者全員による総採取量 (括弧内は、 当該作業日の収穫が最小であった個人の採 取量～最大であった個人の採取量)	採取作業者全員 による総収入額
①	2010年7月27日 (火)	31人	2,842kg ( 3kg ~ 216kg)	THB 11368
②	2010年7月28日 (水)	23人	1,550kg ( 4kg ~ 133kg)	THB 6,200
③	2010年7月29日 (木)	21人	1,178 kg ( 8kg ~ 136kg)	THB 4,712
④	2010年7月30日 (金)	20人	912 kg ( 8kg ~ 134kg)	THB 3,642
⑤	2010年7月31日 (土)	15人	1,054 kg ( 8kg ~ 231kg)	THB 4,216
⑥	2010年8月 1日 (日)	18人	932 kg ( 1kg ~ 185kg)	THB 3,728
⑦	2010年8月 5日 (木)	25人	2,038 kg ( 16kg ~ 237kg)	THB 8,152
⑧	2010年8月 6日 (金)	18人	1,364 kg ( 19kg ~ 202kg)	THB 5,456
⑨	2010年8月 7日 (土)	15人	927 kg ( 18kg ~ 131kg)	THB 3,708
⑩	2010年8月 8日 (日)	21人	1,503 kg ( 19kg ~ 164kg)	THB 6,012
⑪	2010年8月 9日 (月)	17人	1,028 kg ( 18kg ~ 140kg)	THB 4,112
⑫	2010年8月13日 (金)	25人	2,283 kg ( 18kg ~ 281kg)	THB 9,132
⑬	2010年8月14日 (土)	25人	1,613 kg ( 22kg ~ 181kg)	THB 6,452
⑭	2010年8月15日 (日)	24人	2,035 kg ( 18kg ~ 265kg)	THB 8,140
⑮	2010年8月16日 (月)	20人	1,427 kg ( 12kg ~ 196kg)	THB 5,708
⑯	2010年8月17日 (火)	13人	586 kg ( 4kg ~ 83kg)	THB 2,344
⑰	2010年8月23日 (月)	21人	1,602 kg ( 4kg ~ 232kg)	THB 6,408
⑱	2010年8月24日 (火)	28人	2,334 kg ( 16kg ~ 205kg)	THB 9,336
⑲	2010年8月26日 (木)	23人	2,027 kg ( 8kg ~ 174kg)	THB 8,108
⑳	2010年8月27日 (金)	20人	1,440 kg ( 23kg ~ 196kg)	THB 5,760
㉑	2010年8月28日 (土)	19人	1,012 kg ( 19kg ~ 215kg)	THB 4,048
合計	21日間	延べ 442人	31,687 kg (266kg ~ 3,937kg)	THB 126,742

表4が示す様に、期間中の採取作業延べ人数は442人を数え、採取作業者全員による期間内

総採取量は31,687 kgであり、採取作業者全員による総収入額はTHB 126,742である。よって、作業者の1人1日当たりの平均採取量は71.7 kg、採取作業者1人1日当たり平均収入額はTHB 286.7となる。また、最小採取量の1日当たり平均は12.7 kg、最大採取量の1日当たり平均は187.5 kgとなる。なお、採取作業期間中、仏教歴の休日、国民の休日、祖霊祭祀「キジュ」の日、村人が凡そ10人以上村外に出掛ける日、人数の比較的多い来訪者グループの入村前日（当該グループ来訪の準備日）、ニウエ氏の出村日、及びニウエ氏が村内の農作業で多忙な日等には、ニウエ氏はドラム缶製の容器による湯湧しをせず、タケノコ茹での作業は行なわれない。よってこれらの日々は、タケノコ採取は公休日となる<sup>62)</sup>。

また、2010年の採取作業者1人当たり採取量合計（括弧内は収入額合計）の上位3名は、次の通りである。第1位は2,547 kg（THB 10,188）のモンティアン氏 Mongtian, 第2位は2,442 kg（THB 9,768）のドゥアングオ氏 Duangkaew, 及び第3位は2,146 kg（THB 8,584）のディ氏 Dhi である。

### 5-3 タケノコの採取に関するデータ (2): 2009年

詳細な記録が残されている2009年度のタケノコ採取作業に関するデータを整理し、その結果表5を得た。同表には採取作業日、採取作業人数、採取作業者全員による総採取量、当該作業日の採取が最小であった個人の採取量及び最大であった個人の採取量、並びに採取作業者全員による総収入額が、年月日別に示されている。

表5 ホエヒンラートナイ村に於けるタケノコの採取: 2009年7月～8月

作業日 番号	採取作業日	採取作業人数	採取作業者全員による総採取量（括弧内は、 当該作業日の収穫が最小であった個人の採 取量～最大であった個人の採取量）	採取作業者全員 による総収入額
①	2009年7月 8日（水）	7人	582 kg（21kg～200kg）	THB 2,037
②	2009年7月 9日（木）	10人	825 kg（10kg～162kg）	THB 2,922
③	2009年7月10日（金）	10人	536 kg（16kg～107kg）	THB 1,876
④	2009年7月13日（月）	10人	373 kg（13kg～70kg）	THB 1,305
⑤	2009年7月14日（火）	12人	574 kg（17kg～126kg）	THB 2,009
⑥	2009年7月16日（木）	12人	739 kg（28kg～90kg）	THB 2,586
⑦	2009年7月17日（金）	16人	961 kg（13kg～222kg）	THB 3,363
⑧	2009年7月18日（土）	3人	268 kg（32kg～151kg）	THB 938
⑨	2009年7月19日（日）	14人	915 kg（24kg～135kg）	THB 3,202
⑩	2009年7月20日（月）	12人	989 kg（6kg～179kg）	THB 3,461
⑪	2009年7月21日（火）	15人	782 kg（8kg～134kg）	THB 2,737
⑫	2009年7月23日（木）	14人	739 kg（6kg～110kg）	THB 2,586
⑬	2009年7月24日（金）	19人	1,294 kg（6kg～122kg）	THB 4,520
⑭	2009年7月25日（土）	14人	820 kg（8kg～163kg）	THB 2,870
⑮	2009年7月26日（日）	13人	844 kg（29kg～113kg）	THB 2,954

62) 2010年度の採取作業期間中の休日とその理由は、次の通りである。① 8月2日(月): バヤップ大学等からの学生団体客来訪の準備日、② 8月3日(火): 仏暦の休日、③ 8月4日(水): GONGOVA 参加者来訪の準備日、④ 8月10日(火): 仏暦の休日、⑤ 8月11日(水): GONGOVA 参加者及び同伴村民10人によるカンベンヒン村への東洋ミツバチ養蜂研修旅行日、⑥ 8月12日(木): 母の日(祝日)、⑦ 8月18日(水): 仏暦の休日、⑧ 8月19日(木): 隣村ヒンラートノック村に於ける祖霊祭祀「キジュ」の日、⑨ 8月20日(金): 村内焼畑農耕地各所に於ける稲作祭祀日、⑩ 8月21日(土): 祖霊祭祀「キジュ」の準備日、⑪ 8月22日(日): 祖霊祭祀「キジュ」の日、及び⑫ 8月25日(水): 仏暦の休日。

「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」現地調査（富田、川嶋）

⑬	2009年7月27日（月）	11人	621 kg（15kg～177kg）	THB 2,173
⑭	2009年7月28日（火）	8人	701 kg（15kg～210kg）	THB 2,453
⑮	2009年7月29日（水）	17人	1,162 kg（20kg～174kg）	THB 4,067
⑯	2009年7月31日（金）	11人	716 kg（15kg～166kg）	THB 2,506
⑰	2009年8月01日（土）	6人	294 kg（8kg～119kg）	THB 1,029
⑱	2009年8月02日（日）	6人	332 kg（6kg～126kg）	THB 1,162
⑲	2009年8月08日（土）	24人	2,209 kg（4kg～222kg）	THB 7,731
㉑	2009年8月09日（日）	18人	1,282 kg（8kg～196kg）	THB 4,487
㉒	2009年8月10日（月）	20人	1,262 kg（6kg～121kg）	THB 4,417
㉓	2009年8月11日（火）	15人	766 kg（2kg～140kg）	THB 2,681
㉔	2009年8月13日（木）	14人	886 kg（14kg～145kg）	THB 3,101
㉕	2009年8月15日（土）	14人	976 kg（6kg～169kg）	THB 3,416
㉖	2009年8月16日（日）	10人	657 kg（12kg～160kg）	THB 2,299
㉗	2009年8月17日（月）	15人	864 kg（4kg～152kg）	THB 3,024
㉘	2009年8月18日（火）	13人	821 kg（25kg～175kg）	THB 2,873
合計	30日間	延べ383人	24,790 kg（397kg～4,536kg）	THB 86,785

表5が示す様に、期間中の採取作業者延べ人数は383人を数え、採取作業者全員による期間内総採取量は24,790kgであり、採取作業者全員による総収入額はTHB 86,785である。よって、作業者の年間1人1日当たりの平均採取量は64.7 kg、採取作業者1人1日当たりの平均収入額はTHB226.6となる<sup>63)</sup>。また、最小採取量の1日当たり平均は13.2 kg、最大採取量の1日当たり平均は151.2 kgとなる。

なお、2009年の採取作業者1人当たり採取量合計（括弧内は収入額合計）の上位1名は、2,257 kg（THB 7,899）のモンティアン氏である。

#### 5-4 タケノコの採取に関するデータ (3): 2008年

詳細な記録が残されている2008年のタケノコ採取作業に関するデータを整理し、その結果表6を得た。同表には採取作業日、採取作業人数、採取作業者全員による総採取量、当該作業日の採取が最小であった個人の採取量及び最大であった個人の採取量、並びに採取作業者全員による総収入額が、年月日別に示されている。

表6 ホエヒンラートナイ村に於けるタケノコの採取: 2008年7月～8月

作業日番号	採取作業日	採取作業人数	採取作業者全員による総採取量（括弧内は、当該作業日の収穫が最小であった個人の採取量～最大であった個人の採取量）	採取作業者全員による総収入額
①	2008年7月20日（日）	25人	1,755 kg（9kg～175kg）	THB 6,142
②	2008年7月21日（月）	21人	1,932 kg（27kg～269kg）	THB 6,762
③	2008年7月22日（火）	14人	1,164 kg（39kg～189kg）	THB 4,074
④	2008年7月23日（水）	16人	1,038 kg（30kg～114kg）	THB 3,633
⑤	2008年7月26日（土）	15人	976 kg（9kg～121kg）	THB 3,416
⑥	2008年7月27日（日）	15人	906 kg（10kg～121kg）	THB 3,171

63) 2009年の採取作業期間中の休日とその理由は、次の通りである。① 7月11日(土): ニウエ氏が焼畑農耕地で仕事（タケノコの湯湧し場が閉鎖）、② 7月12日(日): ①と同じ、③ 7月15日(水): 仏暦の休日、④ 7月22日(水): 仏暦の休日、⑤ 7月30日(木): 仏暦の休日、⑥ 8月3日(月): 祖霊祭祀「キジュ」の準備日、⑦ 8月4日(火): 祖霊祭祀「キジュ」の日、⑧ 8月5日(水): 理由不詳、⑨ 8月6日(木): 仏暦の休日、⑩ 8月7日(金): 理由不詳、⑪ 8月12日(水): 母の日(祝日)、及び⑫ 8月14日(金): 仏暦の休日。

⑦	2008年7月28日 (月)	11人	600 kg ( 28kg ~ 82kg)	THB 2,100
⑧	2008年7月29日 (火)	14人	440 kg ( 19kg ~ 53kg)	THB 1,540
⑨	2008年7月30日 (水)	15人	618 kg ( 13kg ~ 103kg)	THB 2,163
⑩	2008年7月31日 (木)	23人	820 kg ( 9kg ~ 71kg)	THB 2,870
⑪	2008年8月 2日 (土)	21人	1,053 kg ( 10kg ~ 117kg)	THB 3,685
⑫	2008年8月 3日 (日)	17人	771 kg ( 3kg ~ 109kg)	THB 2,698
⑬	2008年8月 4日 (月)	14人	632 kg ( 14kg ~ 105kg)	THB 2,212
⑭	2008年8月 5日 (火)	2人	95 kg ( 31kg ~ 64kg)	THB 332
⑮	2008年8月 6日 (水)	19人	988 kg ( 3kg ~ 157kg)	THB 3,458
⑯	2008年8月 7日 (木)	18人	910 kg ( 9kg ~ 165kg)	THB 3,185
⑰	2008年8月 8日 (金)	13人	619 kg ( 7kg ~ 140kg)	THB 2,166
⑱	2008年8月10日 (日)	5人	341 kg ( 30kg ~ 113kg)	THB 1,193
⑲	2008年8月17日 (日)	24人	1,709 kg ( 8kg ~ 156kg)	THB 5,981
⑳	2008年8月18日 (月)	15人	783 kg ( 12kg ~ 144kg)	THB 2,740
㉑	2008年8月19日 (火)	9人	365 kg ( 19kg ~ 119kg)	THB 1,277
㉒	2008年8月21日 (木)	6人	119 kg ( 4kg ~ 37kg)	THB 416
㉓	2008年8月25日 (月)	19人	986 kg ( 5kg ~ 204kg)	THB 3,451
㉔	2008年8月26日 (火)	11人	502 kg ( 3kg ~ 125kg)	THB 1,757
合計	24日間	延べ 362人	20,122 kg (351kg ~ 3,053kg)	THB 70,422

表6が示す様に、期間中の採取作業員延べ人数は362人を数え、採取作業員全員による期間内総採取量は20,122 kgであり、採取作業員全員による総収入額は THB 70,422である。よって、作業員の年1人1日当たりの平均採取量は55.6 kg、採取作業員1人1日当たりの平均収入額は THB 194.5となる<sup>64)</sup>。また、最小採取量の1日当たり平均は14.6 kg、最大採取量の1日当たり平均は127.2 kgとなる。

なお、2008年の採取作業員1人当たり採取量合計（括弧内は収入額合計）の上位2名は、次の通りである。第1位は1,742 kg (THB 6,097) のモンティアン氏、第2位は1,199 kg (THB 4,196) のドゥアングオ氏である。

### 5-5 タケノコの採取に関する村人の共有認識

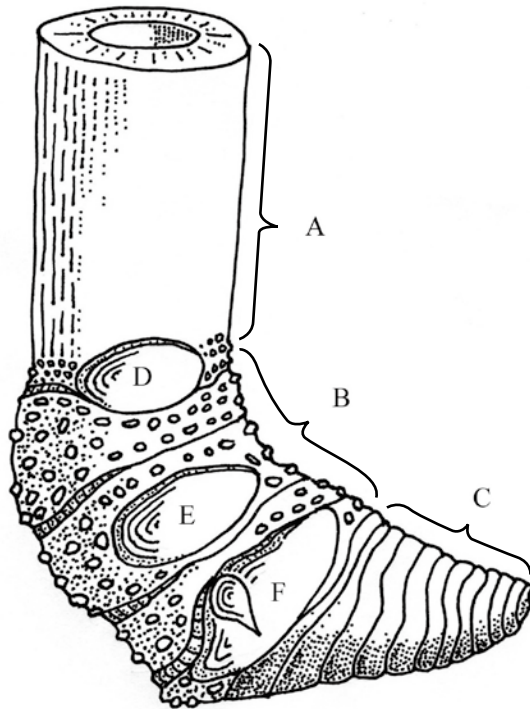
ホエヒンラートナイ村の村人は、タケノコの採取に関して、次の認識を共有しているように思われる。

- (1) 村人は、村内の竹林及びタケノコを共有する。
- (2) 村人は、村内の竹林を特定区画に分けて、各区画を個別に管理する。
- (3) (1)及び(2)に関する補則: 全ての村人は、竹林全ての個別管理区画内で、タケノコを採取する権利を有する。
- (4) (3)に関する補足: 慣例として（個別管理者への優位性付与として）、任意の個別管理者 A とその手伝いをする村人数名はグループを組み、A の個別管理区画内でタケノコの採取

64) 2008年の採取作業員期間中の休日とその理由は、次の通りである。① 7月24日(木): 理由不詳, ② 7月25日(金): 仏暦の休日, ③ 8月1日(金): 仏暦の休日, ④ 8月9日(土): 仏暦の休日, ⑤ 8月11日(月): 理由不詳, ⑥ 8月12日(火): 母の日(祝日), ⑦ 8月13日(水): ウィアンパバオのタケノコ加工業者が夏季休業日, ⑧ 8月14日(木): ⑦と同じ, ⑨ 8月15日(金): ⑦と同じ, ⑩ 8月16日(土): 仏暦の休日, ⑪ 8月20日(水): 理由不詳, ⑫ 8月22日(金): 祖霊祭祀「キジュ」の準備日, ⑬ 8月23日(土): 祖霊祭祀「キジュ」の日, 及び⑭ 8月24日(日): 仏暦の休日。



図1 マチクの稈



〔注〕

- (1) A: 眞稈 B: 稈基 C: 稈柄
- (2) D, E, F: 芽子
- (3) 竹ヴァ・クルツの稈基の姿は、マチクのそれに似通っている。
- (4) この挿絵は、竹内叔雄(1932, 『竹の研究』, 養賢堂, 東京, 18頁の第11圖)の一部を参照して、第二筆者が描いた。

作業にあたることができる<sup>65)</sup>。

- (5) タケノコを採取する際には、翌年のタケノコ採取量を少なくとも本年並みに維持する目的で、稈基の第3層から生長する2本のタケノコは採取せずに残し、資源保存を図る(図1参照)<sup>66)</sup>。
- (6) 採取作業期間は、月に1度の頻度で通常催される村人の全員総会で決定される。
- (7) 採取作業期間の直前に数日間を費やして、タケノコの採取を容易にする目的で竹林内の下草刈りを、村人は共同で行なう。

65) 前章で述べた茶の木と同様に、タケノコの親竹であるヴァ・クルツも活用林内に十分に繁茂している。よって、村人が各自管理する区画外にまで出て行き、タケノコを採取する時間がないのが実情である。

66) タケの稈は、地上の眞稈と地下の稈柄(最下部)及び稈基(眞稈と稈柄の間の部分)に分けられる(竹内(1932, 17-18頁)。村人がタケノコを採取する竹種はヴァ・クルツであり、その稈基は3層よりなり、各層は一對の大形な芽子を有する。

- (8) 採取作業期間には、タケノコの採取作業と並行して、タケノコの移植作業（採取がより容易な場所への移植作業）を適時行なう。
- (9) 村内の竹林には10種類を越えるタケが生育している。例えば、ヴァ・クルッ、ヴァ・ミー・ボ、ヴァ・ミー・ス、ヴァ・クレ、ヴァ・ター、ヴァ・ブロー<sup>67)</sup>（餅料理メ・ブローを調理する際に必要な竹筒を作成する為に使用される）、ヴァ・クロー<sup>68)</sup>（竹籠〈たけびご〉作成の材料として使用される）、及びヴァ・ボがある。販売目的のタケノコ採取にあたっては、ヴァ・クルッのみを掘り起こす。<sup>69)</sup>

- 67) 竹ヴァ・ブローの眞程を利用する代表的な料理「ブロー御飯（メ・ブロー／カオ・ラン）」（餅料理とも呼び得る一種の餅菓子）がある（括弧内は白カレン語／タイ語の順で表記）。ブロー御飯に使うヴァ・ブローは眞程の直径が4～5cmのものをを選び、それを長さ80cm（2節分）に切断し、調理用の器として用いる。ここで、メ・ブローの調理手順を記すと次のとおりである。① モチ米を、大きな桶で5時間水に浸す（10時間浸すと、更に美味しい）。② ヴァ・ブローの眞程を利用して、メ・ブローを調理する器に適する竹筒を作る。その際、竹を「2節分の長さ（含まれる節の数は3つ）」毎に切断し、一端の節を一つ残し他の2つの節は削り貫く。このとき、節の削り貫かれた端の部分を斜めに切り落としておくと、その後の調理に便利である。ヴァ・ブローは節の間隔が凡そ40cmなので、竹筒の長さは凡そ80cmになる。用意する竹筒の数は1家族で5～6本であるが、多めに作る時は1家族で竹筒を10本以上用意することもある。③ 火を起こし、焚火の周りに木或いは竹で高さ1m弱の「囲い」を作る。この囲いの作成に要する時間は、慣れている者ならば5～10分で足りる。④ 水に浸しておいたモチ米を、竹筒の容器に9分目まで入れる。⑤ ココナツ・ミルク（マーボ・ティ／ガティ）を600ml、塩を大匙半杯、及び砂糖を300g加える。⑥ モチ米と調味料等が上記の様に積み込まれている竹筒を、焚火の周りの囲いに内側から斜めに立てかけ、直火に当てる。竹筒になるべく均等に火が当たるよう、調理者は竹筒を少しづつ連続的に回転させる。⑦ 10～15分直火に当てると、メ・ブローが出来上がる。村人は、「寒いときメ・ブローは美味しい」、「寒い季節になると、みんなで焚火を囲んでメ・ブローを食べる」と話す。日本の焼き芋と同様に、友人や家族と焚火を囲んで調理する趣きが、この料理の醍醐味と言えよう。ところでメ・ブローの調理には、幾つかの約束事が伴う。例えば、(ア) 調理を集落内では行なわないこと、及び(イ) 調理に使ったヴァ・ブローを集落内に持ち込まないこと（メ・ブローの入った竹筒を集落内に持ち帰ることは許される）である。その理由は、調理に使用したヴァ・ブローを集落内へ持ち帰ると、子どもに祟りがあると昔から信じられていることにある。また村の老人は、「集落内でメ・ブローを調理したり、メ・ブローの調理に使った竹を集落内に持ち込むと、犬が喧嘩をし、村人は著しい不快感を覚える」と、語ってくれた。これと似た約束事の伴う植物に、大型の団扇のような葉を持つ、ソテツに似た植物「ダチョ・ドゥ（タウ）」がある。この樹木の尖頭は、タケノコのように柔らかく食用に適する芽の部分がある。この部分を鶏肉や豚肉と一緒にスープにすると美味である。しかし、ダチョ・ドゥの葉や幹は、集落内に持ち帰ってはいけない。
- 68) 竹籠の作成に竹ヴァ・クローが利用される理由は、この竹を材料にすると、丈夫で柔らかくよく撓う竹籠ができることにある。「竹籠」について幾分敷衍して述べると、次の通りである。(1) 竹籠名:「チュガー（ドゥ）」、(2) 使用工具: 山刀「フェー（ミー）」（刃渡り凡そ30cm）、(3) 加工手順: ① 竹ヴァ・クローを凡そ60cmの長さで輪切りにする（輪の厚みは凡そ5mm）。② 輪切りにした竹を凡そ10mm間隔で縦に割く。③ 幅10mm×厚み5mm×長さ60cmの細い竹棒の、外側緑色の表皮及び内側白色の裏皮を剥ぎ落とす。④ 更に、それを5～6枚に割くと、幅10mm×厚み1mm以下×長さ60cmの竹籠が仕上がる。
- 69) 竹種毎に主用途を記すと、次の通りである。(1) 竹ヴァ・クロー（タイ・ヒア）の主用途: 生長1年目の眞程を縦に割いて、竹籠等を編む竹籠として利用する。竹ヴァ・クローから作った竹籠で編んだ竹籠は頑丈で、カボチャ（ルケボ／ファットン）やウリ（ディ／デーン）等の重みに充分耐え得る。なお竹籠は、農作物や種子等を焼畑と集落の間で運搬する目的容器として、頻繁に使用される。(2) 竹ヴァ・ミー・ボ（タイ・サン）の主用途: 生長2年以上の眞程は、家屋建設用の床材及び壁材として利用される。生長5～6年のものは、特に頑丈である。(3) 竹ヴァ・ミー・ス（タイ・サン・ダム）の主用途: 生長2年以上の眞程は、家屋用床材及び壁材として利用される。この竹も生長5～6年のものは特に頑丈である。ヴァ・ミー・ボとヴァ・ミー・スは近縁種であり、前者は黄みがかり後者は黒みがかった（「ボ」と「ス」はカレン語で、夫々「黄色」

- (10) タケノコの料理を楽しむ。<sup>70)</sup>
- (11) タケノコの栽培には化学肥料及び除草剤の類は一切使用しない。
- (12) ウィアンパパオ市内のタケノコ加工業者へタケノコを納入する作業は、主としてソングラム氏（プリーチャ氏の義弟）及びスウォン氏（村長）が担当する。
- (13) 身体に無理をし過ぎないように配慮して、タケノコ採取の労働作業にあたる。

## 6 おわりに

### 6-1 新たに得られた知見

主として現地調査に基づく本稿では、ホエヒンラートナイ村に於ける森林保全型農業の営まれ方、就中、村人の主要現金収入源である換金性作物の栽培管理方法を中心に考察した。その成果として以下の知見を得た。

- (1) バンホエヒンラートナイ村には、「自然環境問題一般」や「同村が実践する森林保全型農業」に関心を寄せる視察者のグループが、年間約100組訪れる（第1-2, 3-2節）。視察の目的で来村する、地域の政治家及び上級公務員、並びに国内外の研究者らとの交流は、ともすると地理的に孤立しがちな山村に、比較的高い知的水準で外部社会と触れ合う好個の機会を提供する。
- (2) 同村は、視察者グループの求めに応じて、森林保全型農業に関する現地研修を実施している。この試みは、村の森林管理哲学を外部社会へ広く伝達する上で役立ち、結果として同村が外部社会から相応の評価を得ることに寄与し、併せて定常的な現金収入を村へ齎らす（第1-2, 3-2節）。
- (3) 同村内の焼畑農耕地では、伝統的な農法が維持されている一方、村人が有する水田の一部に近代的農法が導入されている（第3-1節）。伝統的農法と顕著な競合が生じない限り、村人は新しい農法の導入に必ずしも否定的ではない。

---

と「黒色」を意味する)。なおヴァ・ミー・ボにはそこそこの値がつくが、ヴァ・ミー・スは黒ずんでいるために売り物にはならない。

- 70) タケノコの料理（既に述べたメ・ブロー／カオ・ランは除く）に関しては、村人より次のレシピが得られた。
- (1) ホエヒンラートナイ村産のタケノコを使用した料理（料理名は「カレン語（タイ語）」で表記）：① スープ料理「ポー・ポー（ゲー・ノーマイ）」。
  - ② 炒めもの料理「クエ・ポー（パット・ノーマイ）」。
  - ③ 湯掻いたタケノコをトウガラシやナスと一緒に和え物にする料理「ムサトー・ルイ・オ・ポー（ギン・ナンブリック・ノーマイ）」。
  - ④ トウガラシの効いたサラダ「ファーオ・ポー（ヤン・ノーマイ）」。
  - ⑤ 酸味の効いた保存食であるタケノコの漬物「ポー・チャー（ノーマイ・ソム）」。
  - ⑥ 乾燥させた保存食である干しタケノコ「ポー・フェ（ノーマイ・ヘーン）」。
  - ⑦ タケノコの蒸し料理「フー・ポ・ルイ・オ・ポー（ヌン・ノーマイ・ジン・ナンブリック）」。
  - ⑧ 野菜とトウガラシで和えた、タケノコの粥料理「ポ・ポー・ポー・ドゥ・バ・グウ（ゲン・カオ・ブ・サイ・パット・ガッ・ヘーン）」。
  - ⑨ 竹筒で沸かした湯で入れるお茶「ルア・ナム・ティー（ラム・チャー）」。
- なお、タケノコを用いた菓子類は、ホエヒンラートナイ村では作られていない。上記の⑤及び⑥は、タケノコの収穫期（7, 8, 及び9月）以外の時期に、炒め物やスープの具材として用いられる。⑨は、竹の馥郁たる香と甘い味がともに微かに漂う、趣深いお茶である。なお、脚注57に記されている10種類の竹のタケノコは全て食用に適しており、なかでも竹ヴァ・クレーのタケノコは、細目で食べ易い。(2) タケノコを使用した一般的なタイ料理（代表的なものは次の2つである）：① スープ料理「ゲー・ノーマイ」。② 炒めもの「パット・ノーマイ」。

- (4) 過去40年間に、村の人口は約2倍に増加した。この事態に伴うコメの需要量増大に対しては、活用林内の陸稲栽培地を拡張するのではなく、村人が村外に所有する水稲耕作地面積の拡張（「婚姻の結果として齎された水田相続」や「村人の水田購入」による拡張）により、必要供給量を賄って来た（第3-1節）。
- (5) 同村が取り組んでいる森林保全型農業では、水田を除き、通常の農業や農業機械を取って使用しない。よって、同農業には多分に労働集約的な農作業が伴う（第3-3節）。この特性は、若者世代と中高年世代が共に協力して農作業に携わる機会を創出し、この機会を介して両者間のコミュニケーションを促す。
- (6) 同村の森林保全型農業では、陸稲栽培や水稲栽培、そこへ間作及び混作の形で植え付けられる多種多様な自給自足用作物の栽培、並びに比較的高い収入が安定的に約束される換金性作物の栽培がなされるために、長期的な農閑期はない（第3-3節）。従って村人には、年間を通じて魅力的な就労機会が村内で保障されている。
- (7) 換金性作物である茶葉とタケノコの収穫は、確実な現金収入を毎年村に齎らす（第4-1節、第5-1節）。この特性は上記(6)の特性と併せて、同村生まれの若者の村内定住率を高める。
- (8) 村内の労働力は、ゆとりのある形で（即ち肉体を酷使しない形で）農作業に当てられる（第4-1節、第4-4節）。村人は、現金収入の最大化には必ずしも執着せず、この知足の姿勢に助けられて心理的にゆとりのある山村生活を送る傾向にある<sup>71)</sup>。

ホエヒンラートナイ村の人々の、以上の様な持続的山村生活を可能にしているものは何であろうか。それは、この村の村人達が共有する、生活哲学と共同体ルールであると思われる。まず村の生活哲学に目を遣ると、利潤又は収入の最大化に必ずしも執着しない「足るを知る」と言う基本的な生活姿勢<sup>72)</sup>と、村人達の主たる生活の場である森林そのものの管理に対する哲学であろう。この森林管理哲学とは、村での生活及び自然環境資源の保全を将来に互に継続して行くため、「資源の再生産が確実に可能を考えられる範囲に森林の利活用を留めておくこと」、即ち簡潔に表現すれば、「森林の保全と自然環境資源の持続的利活用」、に努めると言うことに尽きるであろう。

次に、上記の生活哲学を実践する上で重要な共同体ルールを考えると、次の様なことが言えるであろう。即ち、ホエヒンラートナイの村人達は、森林の利活用の際して、「自然環境資源の保護とその有効利活用が巧みにセットされた種々の為来り又は慣行」を、共同体内部のルールとして共有している。そうした為来りや慣行は、「自発的な線引き」と呼ぶべき、自然環境資源の利活用に対する基本原則が生み出したものとして理解できよう。この基本原則、即ち自発的線引きに則った形で、村人達の生産活動は規定されている。その具体例が、タケノコ採取

71) 例えば、村の若者からよく耳にする感想の一つに、「森林を切り開いて飼料用トウモロコシを栽培すれば、現金収入は確実に増加するだろうが、森林を禿山にしてしまうと暑くなり住み難くなるので、森林を切り開きたくはない」との発言がある。

72) 19世紀後半（1865年）に中国を訪れたH.シュリーマン（1865<邦訳 1998, P.50>）は、古北口の村へ万里の長城から下って来た際に出合った山岳人達を、「彼ら…はゆったりとゆとりのある生活をしているようだ」と記している。当時の古北口の村人達も、ひょっとすると現在のホエヒンラートナイ村の人々に似て、「足るを知る」生活姿勢を善しとしていたのかも知れない。

に当たっての為来りであり、オオミツバチの蜂蜜採取の取り決めである。こうした個別の共同体ルールは、恐らく同村の様々な自然環境資源の利活用行為に於いて、存在していると推察される。

タイ北西部山村に居住するカレン族は時として、「祖先伝来の中山間地農法を頑なに保持している人々」として、非難を受ける。しかし上記の考察からすれば、この見方には、一斑（いっぽん）を見るも全豹をト（よく）せざるの嫌いがある。いみじくも同村の第一指導者プリーチャ氏は、「同村の森林（熱帯季節林）は一世代が相手にできる対象ではなく、地域の人々が長年に亙り大切に保全し、造り出し、利用してきたものである。この事実を念頭に置き注意深く且つ創造的に森林に臨めば、村の経済基盤及び生活水準の持続的な充実及び向上は、可能であるはず。」と、説明する。かかる創造的森林保全型農業理念が単なる絵空事でないことは、森林管理に関心を寄せる多くの視察者・研究者グループが同村を訪れている事実、並びに、同村で出生した若者の示す高い村内定着率が、如実に物語っている。

以上の認識を踏まえ、草の根的な NGO 国際協力プログラム GONGOVA を一つの実践例とするヴォランティア活動を、特に森林保全型農業に配慮してタイ北西部の山村で執り行なう場合、例えば次の指針設定が可能であろう。

- (1) 村の「生活哲学」と「共同体ルール」を、理解・尊重するように努力する。
- (2) 「創造的森林保全型農業の推進に資する、望ましい外部社会（別けても市場経済）との向き合い方」に関する、村人の視点に沿った形で支援活動を行なう。
- (3) 協力対象山村に於ける当該山村生まれの若者の村内定住率は、「森林保全型農業の充実度指標」の一つとして適用できる。
- (4) ヴォランティア活動参加者が協力対象山村で活動する際に、「森林は一世代が相手にできる対象ではなく、長年に亙り地域の人々が大切に扱ってきたもの」という、村人の基本的な考え方を尊重する。
- (5) 適切な換金性作物とその栽培・収穫管理方法の的確な選択が、創造的森林保全型農業成功の鍵である。

## 6-2 今後の課題

本研究が積み残した作業には、例えば以下の考察課題に関するものがある。

- (1) 創造的森林保全型農業を標榜する、カレン・ネットワークの運営組織形態と活動内容（第1-2章、第3-2章）。
- (2) 森林保全型農業に携わるカレン族を、「先住民 indigenous people」として範疇化するアプローチ（第2-1章）。
- (3) 陸稲と水稲の相違に関して、山村に居住するカレン族が抱く認識（第3-1章）。
- (4) 陸稲用耕地と水稲用耕地との間に見られる、農業生産効率の比較（第3-1章）。

## 謝辞

本研究を進める上で必要なインタビューに対して、現地で以下の諸氏に協力戴いた。ホエヒンラートナイ村の第一指導者プリーチャ・スイリ氏（主要インタビューは2010年9月7日（火）

に彼の自宅に於いて行なわれた), 並びに同村の森林管理責任者チャイプラサート・ポカ氏, ニウエ・スイリ氏, ダオチャイ・スイリ氏 Daochai Siri, 及びジャンベン・スイリ氏 Janphen Siri (以上4氏のインタビューは, 2010年7月24日~9月24日に同村内で行われた。), NGO 団体 I-KAP タイ北西部地域代表のプラサート・タラガンスパークン氏 (2010年9月18日, 於同村), タイ国首相官邸付視察官ユムラット・サクジラパボン氏 (2010年9月10日, 於同村), 森林局チェンマイ支部調査員パドドン・タヌチット氏 (2010年9月2日, 於同村)。また, 緑政学が専門の都市緑化技術開発機構専務理事の小川陽一氏からは, ホエヒンラートナイ村への幾度びかの訪問経験を踏まえ, 森林保全型農業について貴重な御意見を賜り, 海洋博覧会記念公園管理財団常務理事兼本部長の花城良廣氏からは, 熱帯季節林の植物相について御高教に與った。記して謝意を表する。

## 参考文献

Akarinn Kiyosat no-date, *Karen's Intellectual Background toward Forest Management for Watershed Conseruation Area at Ban Huay Hin Lahd Nai, Amphoe Wiang Pa Pao, Changwat Chiang Rai*, Mimeograph.

Atit Siri 2009, *Forest Calendar in Ban Huay Hin Lahd Nai (DVD)*, GONGOVA.

Ban Huay Hin Lahd Nai and Two Others 2010, *Report on the Agricultural Products, Agro-forestry, and the Weather at Ban Huay Hin Lahd Nai, Ban Huay Hin Lahd Nok, and Ban Pa Yuyam in Banpong Sub-district of Wiang Pa Pao District*, Mimeograph.

Konchatlook 2010, *Konchatlook (newspaper)*, May 2, 2010, Bangkok.

Pakorn Khonsawat 2005, *Development of Community Forest at Ban Huay Hin Lahd Nai in Wiang Pa Pao District (Individual Study I and II)*, Mimeograph, Chiang Rai Office of Royal Forest Department.

Prasert Trakansuphakon and Thawong Kamponkun 2005, *System of Rai Mun Wian: Organization, Knowledge, and Pga Konyaw Network*, Chiang Mai: I-KAP Network.

Swit Rattanamany and Wini Phonawarat 1999, *A Case Study of Community Forest of Ban Huai Hin Lat Nai (Muu 2), Banpong Subdistrict, Wiang Pa Pao District, Chiang Rai Province*, Mimeograph, Bangkok: Silapakorn University.

以上, タイ語文献 (タイ語文献名の英訳は第一筆者による)。

Kawashima, Tatsuhiko and Runako Samata 2002, "International Volunteer Activities of GONGOVA: Grassroots Programme for the Underprivileged Villages in Thailand," 『学習院大学経済論集』、第39巻 第2号、学習院大学、東京、83-96頁。

Maruja Salas (ed.) 2006, *Pga K'nyau: Knowledge on Rotational Farming in Northern Thailand*, Chiang Mai: IKAP-Network.

PPT 2008, "Forest Makes Community," *In the Way of Life in Pga Konyaw*, Bangkok: PTT Public Community Ltd, pp.178-181.

海洋博覧会記念公園管理財団 2009、『[色と手ざわりで探せる] 熱帯くだもの図鑑』、(財) 海洋博覧会記念公園管理財団、沖縄。

川嶋辰彦 2009、「私の『ボランティア』教育論 — 学生と子どもたちに伝えた自然の知恵、逆境の教

「タイ北西部山村に居住するカレン族の農業経済活動」現地調査（富田、川嶋）

え」、『文藝春秋』、第87巻 第8号、東京、310-320頁。

シュリーマン, H. (Heinrich Schlieman) 1865 (邦訳1998)、『シュリーマン旅行記—清国・日本—』 (*La Chine et le Japon au temps présent*)、石井和子 (訳)、講談社、東京。

竹内叔雄 1932、『竹の研究』養賢堂、東京 (復刻本, 2010、『こと典百科叢書』第4巻、大空社、東京)。

富田育磨・川嶋辰彦 2010、「『タイ北西部山村に居住するカレン族の音楽政治』現地調査—草の根的国際協力 NGO ヴォランティア活動の展開に肝要な文化理解—」、『学習院大学経済論集』、第47巻 第3号、学習院大学、東京、123頁-149頁。

日本タイ学会 2009、『タイ事典』、めこん、東京。